

宮城県瀬峰町文化財調査報告書第1集

がくげつ遺跡

—平安時代の竪穴遺構—

昭和52年3月

宮城県瀬峰町
瀬峰町教育委員会

がんげつ遺跡正誤表

—平安時代の堅穴造構—

ページ	行	誤	正
4	3	別表1	第1表
18	第7図	(脱落)	網目部分に「焼土面」と註記する。
21	10	(第17図2)	(第17図2)
27	第4表	3行目「黄褐色土層(第4層)	床面直上
30	第5表	18-2 9-5 褐色土層	18-2 褐色土層
#	#	18-5 褐色土層	18-5 9-4 褐色土層
#	#	18-6 9-4 貼り床層	18-6 9-5 貼り床層
34	註 1	『研究紀等』	『研究紀要』
#	21	重複し、南コーナー	重複し、南コーナー
#	25	南北に走る……南北の部分	南北に走る……南北の部分
41	14	須恵系の土器以前に	須恵系の土器の前に
#	15	11世紀初頭以前に	11世紀初頭より前に
61	1	(見出しの活字の大きさ)	(P 62 「5.まとめ」と同級活字)
75	写真説明	5 鉢	5 壺
77	#	2 鉄鎌	2 鉄鎌 1
#	#	3 鉄鎌 1. 2. 3. 4	3 鉄鎌 2. 3. 4

第1表 潟峰町内の奈良、平安時代遺跡地名表(5頁)

遺跡番号	正		誤
	字、遺跡名	遺跡番号	
3	大里、富葉沢東	3	上富、葉沢東
4	大里、富町田	4	上富、町田
5	大里、富寺浦	5	# # 寺浦
6	大里、富岩石	6	富、岩石
7	大里、陽岩寺裏	7	# 脊岩寺裏
14	大里、下富前	14	藤沢、沖ノ前
15	大里、小山	15	# # 小山
30	大里、葉沢西	30	# # 葉沢西
31	大里、中山	31	# # 中山
32	藤沢、長者原	32	# # 長者原

宮城県瀬峰町文化財調査報告書第1集

がくげつ遺跡

—平安時代の豊穴遺構—

昭和52年3月

宮城県瀬峰町
瀬峰町教育委員会

発刊に寄せて

大雪、大寒波、冷害の後始末、そしてなおも続く不況、その中で昭和52年の新春を迎えた。科学技術万能に支えられた高度成長は、世界的な見直しのもとで、安定成長という名のもとに、そのテンポをダウンしなければならなくなつた。

こうして人類の歴史が作られてゆく。瀬峰町も、それらの影響を受けながら、日一日と瀬峰町の歴史を作り上げてゆく。

この瀬峰町の歴史が、百年後、五百年後、千年後、あるいはもっと遠い時代まで、どれ程伝えられ、どれ程残るのだろうか。文化文明がこれ程発達していても、それを保証出来るものは今のところ何もないように思われる。

瀬峰町の過去はどうなっていたのであろうか。それは誰でもが知りたい願いでもある。しかし、残念ながら、まだそれ程知られてはいない。

昭和41年、瀬峰町史が発刊されてわが郷土にも歴史解明のメスが入れられたが、それはごく一部といわざるを得ない。

だが、その解明は、実に困難なことであり、多くの人々の参加と、研究にまたなければならない。

昨今、郷土史の研究が盛んになり、本町においても、その研究家が非常な活躍をしており、その人達の地道な努力で資料が集められ、それらが組立てられて、徐々に、古の瀬峰町が現われて来る。これは実に喜ばしい限りである。

私も不勉強にして、その方面的知識が全くないことを愧している。

この度、熱心な町内の研究家達の要請によって、瀬峰町教育委員会が、がんげつ遺跡の発掘調査をされたことは、一大壮挙と言ってもよい。その報告書が刊行されると聞いて嬉しさ一入のものがある。

この報告書がきっかけとなって、郷土史愛好者が増え、多くの研究家が後に続いたならば、薄明の瀬峰町古代史は必ずや解明されて行くであろうことを信じ、この拙文を寄せる。

昭和52年2月

瀬峰町長 加藤光明

発刊の辞

人間文化の進展に伴ない、新しいものへの憧れと創造が続けられていることは喜ばしいことである。その反面、古いものへの過小評価、先人の遺した、有形、無形の文化財への無関心、破壊が行なわれていることは、人間性の回復、ゆとりあるふるさとづくりの上から見て由々しい問題である。

瀬峰町教育委員会においては、特にこの点に意を用い、文化財保護委員会において無形文化財の育成保存、遺跡等埋蔵文化財の重視をはかり、民間有志の組織された郷土研究会と協力して調査研究を進めてきている。

たまたま昭和49年の春、町内下富の佐々木徳雄氏が農道敷にかかっている住居跡（がんげつ遺跡）を発見したことに鑑を発し、町教育委員会では、文化財保護委員会に諮り、同遺跡の発掘調査を実施することにした。

発掘は5月17日から同29日まで、のべ7日間に亘り、県教育庁文化財保護課の指導を受け、実際の調査には、古川工業高校の三宅宗義、鶴田勝彦、桜井幸喜、集館女子高の金野正諸先生の指導で瀬峰町文化財保護委員、同郷土研究会員、同町職員が当った。

期間中は雨の日もあり、参加者は悪条件を克服して終日熱心に作業を続け、困難な発掘を終えることができたことは感謝に堪えないところで、参加者各位に深甚なる敬意を表したい。

このまとめが、今後の遺跡保存と、破壊されつつある遺構の記録保存のために大きく役立つことができれば、まことに幸いである。

昭和52年2月

瀬峰町教育委員会

教育長 手島正夫

発刊に当って

郷土研究会員であられる佐藤信行さん、佐々木徳雄さん、佐々木尚見さんは、町の考古関係の秀でた研究家であり、特に、土器の判定等においては大変詳しい方々であり、暇を見つけては各方面に足をくばり野外踏査をするという熱心さで、これが「がんげつ遺跡」の発見につながる一助ともなった。

がんげつの土地は民有地で、しかも地ならしをして牧草畑に開墾された場所で、周辺には、いたるところ土器の破片が表露でき、現在においては遺跡の破壊も大分進行している。

本遺跡の周辺も将来は開田する計画とのことで、丁度良い時期に発見、発掘調査されたのである。埋蔵文化財は大抵、こういう機会に発見されるものであって、濫りに掘って発見されるものではない。もし「がんげつ遺跡」も最初から開田等の目的でブルが入れば跡かたもなく破壊されたかも知れない。本遺跡の場合開田前の発掘調査で、我々も眞実に良い体験をし、これを後世に伝え得るのは誠に光栄のいたりである。

ここに発掘調査後二年にして調査報告書を発刊する運びに至ったことは、誠に喜ばしい次第であり、これが町や我国の正史にのり、かつ、この貴重な教訓を、とこしえに遺し得ることは、指導に当られた諸先生方や作業に従事された方々の努力の賜である。ここに厚く感謝しながら、発刊に当り一言挨拶とする次第である。

昭和52年2月

瀬峰町文化財保護委員会

委員長 高橋 亀寿吉

目 次

発刊に寄せて.....	瀬峰町長	加藤 光明
発刊の辞.....	瀬峰町教育委員会教育長	手島 正夫
発刊に当って.....	瀬峰町文化財保護委員会委員長	高橋 亀寿吉
I がんげつ遺跡の位置		
1 地理的位置.....		1
2 考古学的環境.....		4
II 調査経過		
.1 発掘に至る経過.....		12
2 発掘経過.....		13
3 発掘後の経過.....		15
III 遺構の検出.....		
IV 遺 物		
1 遺物の出土状況.....		22
2 出土遺物.....		23
V 考 察		
1 遺構の性格.....		35
2 出土土器と遺構の年代.....		38
3 鋼器・鉄滓について.....		43
4 陸奥国新田郡仲村郷との関連.....		60
5 まとめ.....		62
付章 がんげつ遺跡発掘調査に参加して.....		63
年 表.....		66

表紙題字 瀬峰町長 加藤 光明

例　　言

- 1 本書は、昭和50年5月に発掘調査を実施した宮城県栗原郡瀬峰町富がんげつ遺跡の調査報告書である。本書をもって今次調査の正式報告書とする。
- 2 本書の執筆は、三宅宗議、佐藤信行、金野正、鶴田勝彦、桜井幸喜、佐々木徳雄、白鳥伝が担当した。各々の担当個所については文末に氏名を記して明らかにした。ただ報告書の全体的な調和統一を図って、三宅、佐藤が加除訂正を行なった部分がある。従って最終の文責は両名が負う。
- 3 遺物整理は佐々木徳雄を中心になり、佐々木尚見、佐藤の両名が協力した。
- 4 写真撮影は、遺構関係を加藤優、金野正が担当し、遺物関係は三宅、鶴田、桜井が担当した。また地形測量図は鎌田淑雄が作成し、遺構実測図の作成は主に桜井があたり、遺物実測図は主に三宅、鶴田が作成した。
- 5 本書の編集は三宅宗議を中心に行なった。
- 6 本書の刊行に当り、次の各機関の御指導御協力を頂いた。記して謝意を表する。

宮城県教育庁文化財保護課、宮城県多賀城跡調査研究所、東北大学工学部、東北金属工業株式会社、宮城県古川工業高校機械科、同土木科。
- 7 本文1に、瀬峰町内の奈良・平安時代の遺跡について略述した。内容的に直接本書に関係しないが、昭和41年刊行の「瀬峰町史」古代編の欠を補う意味も兼ねている。なお啓蒙的意味で、二上鎮雄、佐々木尚見、笹川トミコ三氏の感想文を収録し、付章とした。
- 8 本書に使用の地図は建設省国土地理院長の承認を得て $\frac{1}{25,000}$ 地形図を複製したものである。
(昭52、東複第321号)
また空中写真は、宮城県指令522号(52.4.16)によって複製使用の許可を得た。

I がんげつ遺跡の位置

1 地理的位置

がんげつ遺跡は、宮城県栗原郡瀬峰町大里字岩石（通称がんげつという）にある遺跡で、東北本線瀬峰駅の西方約2.5kmの寺沢丘陵に立地している。

宮城県の仙北地方は、追川沿岸（北上川支流）及び、西北部の追川低湿地帯とよばれる連続した沖積平野（仙北平野とよばれる）が広がっている。それは、西北部の100m以下の丘陵台地（栗原丘陵）の東南に広がる湿田地帯である。（註）

瀬峰町は、この栗原丘陵の東南部にあり、町のはば中央を、小山田川、北部を瀬峰川が東流している。又南部は、壹刈川が東流している。その二河川は、南方町の薦葉沼に合流して追川に注いでいる。

三河川の沿岸は、いずれも沖積地で東に延び、登米耕土に接続している。

この河川沿いに発達した、東西に延びる丘陵部は、開析が進んでいる。瀬峰川北岸は、85m～50m以下の丘陵台地である。

小山田川北岸は、大鶴谷、寺沢、下藤沢を結ぶ58m～30m以下のなだらかな丘陵台地（寺沢丘陵）である。

壹刈川北岸は、四ッ塙原、野沢、泉谷を結ぶ30m～20m以下の平坦な台地で、西から東に向ってゆるやかに延びている。

がんげつ遺跡は、中央丘陵台地（寺沢丘陵）のはば中央に立地している。丘陵の尾根を東西に走る寺沢道路の南面傾斜地に存在している遺跡である。

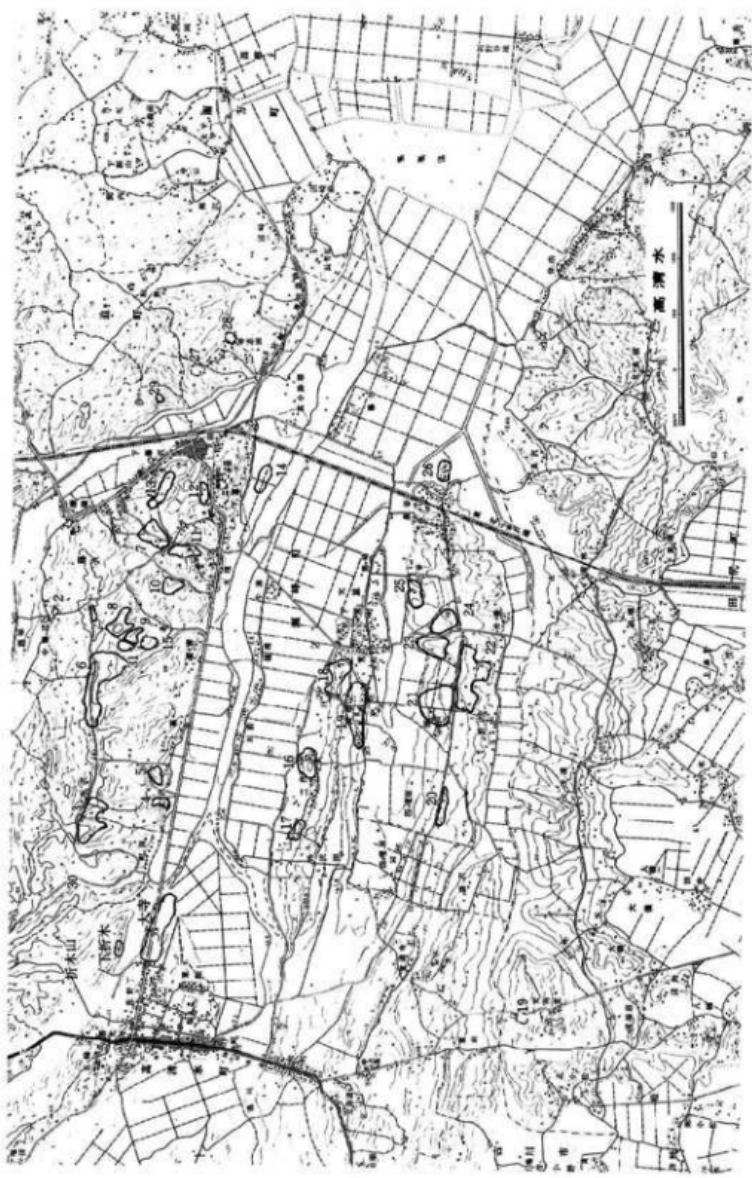
遺跡は、東から北側斜面に、Y字形に造り立った沢田にはさまれた扇状台地である。その中央先端部は、ゆるやかな斜面になって水田面に張り出している。水田面との比高は、約2mである。

遺跡全体の面積は、約5万坪にも及んでいるものと推定される。

（佐々木 徳雄）

註

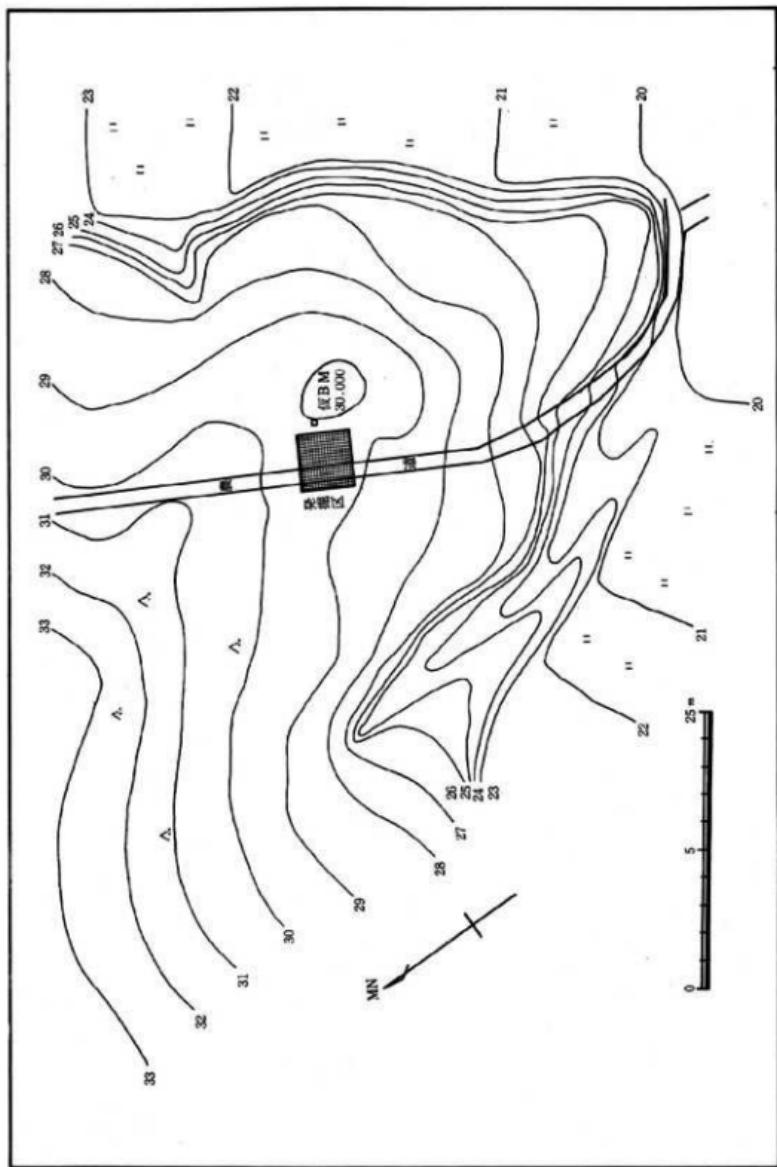
藤原健蔵「宮城県の自然－地形」宮城県史5



第一圖 がんげつ（岩石）遺跡位置図（数字は表1と同じ）

国土地理院1：25000地形図 たかしま〒NU-54-15-13-3（石巻13号-3）を修復

第2図 がんげつ(岩石)遺跡付近地形図(等高線はm)



2 考古学的環境

瀬峰町内の奈良・平安時代遺跡の分布状況

町内には、別表1に示したように、奈良・平安時代の遺跡として29遺跡が挙げられる。この数値は、「点」としてとらえられた遺跡数ではなく「面」としてとらえられた遺跡数である。

因みに佐々木尚見氏が「栗原郷土研究8号」に発表された地名表には58ヶ所の遺跡が記載されている。

遺跡の分布状況を見るに、瀬峰を南・北に二分して小山田川が貫流しているが、この小山田川を境に北と南には比較的平坦な丘陵地帯が形成されている。小山田川北岸の富丘陵は、岩出山、高清水方面から続く、比較的入り組んだ複雑な丘陵相を呈している。寺沢丘陵の南側斜面には、薬沢東、岩石、清水山、坂ノ下裏、下藤沢等の集落跡が群在している。時代は、奈良時代後半～平安時代に属する遺跡が圧倒的に多い。富丘陵北側及び瀬峰川沿岸の小深沢、上藤沢地域の丘陵上には、ほとんど、奈良・平安期の遺跡は見られない。

小山田川南岸の、長根丘陵、四ッ壇丘陵は寺沢丘陵に比べて起伏がゆるく、丘陵上は、広い平坦面を形成している。四ッ壇丘陵の平坦面及び、南、北斜面には、神田、四ッ壇、伊勢堂、ニッ谷等の各遺跡が分布する。時代は奈良時代末に属する遺跡が圧倒的に多い。

四ッ壇丘陵の北側に、低地帯をはさんで、長根、荒町丘陵があるが、この丘陵上にも上荒町、長根、中三代等の平安時代に属する遺跡が多く分布している。

又、わずかではあるが、小山田川の氾濫原中に立地する遺跡がある。下富前遺跡がそれである。下富前遺跡は附近の水田との比高が0.5m前後の微高地を呈し、東西200m前後にわたって遺物の散布が認められる。又、確認はしていないが、下富前遺跡の下流、400m程の宮小路原地区からも、かつて開田された際多量の素焼きの土器が発見されたり、同地内の機関場を作る際にも同様の土器が重なって発見された事があるという（大場重志氏談）。

下富前、宮小路原両地区は、いずれも微高地状の立地ではあるが、当時の小山田川の流路が現在とそれ程変らなかつたとすれば、雨期とか、豪雨等の場合には、この氾濫原全体が冠水することも珍しい事ではなかったと思われる。事実、宮小路原の人達は、つい数年前まで、小山田川の水害になやまされ続け、一部の人達は、高所への移住を余儀なくされ、一方、同川の大規模な河川改修工事によって、ようやく水害から解放された。

（佐藤信行）

第1表 濑峰町内の奈良・平安時代遺跡地名表

1977年3月現在

遺跡番号	字 遺跡名	立 地	出 土 遺 物	時 期	遺物所在	備 考
No 1	藤沢・の場	丘陵南斜面	土師器、須恵器、鉄斧	平安前期	二上頭塚	
2	藤沢・砂田	丘陵北斜面	土師器、須恵器	平安前期	二上頭塚	
3	上富・菜沢東	丘陵腰線	土師器、須恵器	奈良後半～平安前期	佐々木德雄 佐々木尚見	
4	上富・町田		土師器	不 明		未確認
5	〃・寺浦	丘陵南斜面	土師器、須恵器	不 明	佐々木德雄	
6	富・岩石	丘陵腰線 南斜面	土師器、須恵器、鐵器、 鐵斧、土鈴、瓦	奈良後半、 平安前半	瀬峰町教委 佐々木德雄	昭和50年調査 堅穴1株
7	〃・陽岩寺裏	丘陵上	土師器、須恵器	奈 良 末	佐々木德雄	
8	〃・坂下浦1	丘陵斜面	土師器、須恵器	奈良末、平安	佐々木德雄	
9	〃・坂下浦2		土師器、鐵斧	平安前半	佐々木尚見	
10	〃・大堀山	丘陵上	土師器	不 明	佐々木德雄	
11	〃・清水山	丘陵平坦面	土師器、須恵器	奈良前半	佐々木尚見	堅穴1株露出
12	藤沢・下藤沢	丘陵平坦面	土師器、須恵器	奈良～平安	門脇	
13	藤沢・下田	丘陵東斜面	土師器、須恵器	奈良～平安	佐々木德雄	堅穴2株露出
14	藤沢・沖ノ前	沖積地	土師器、須恵器、口刀?	奈良末、平安前	佐々木德雄	
15	〃・小山	丘陵上	土師器	平安	佐々木德雄	
16	大里・三代	丘陵北斜面	須恵器	平安	高橋龟寿吉	
17	〃・中三代	丘陵	土師器、須恵器	平安	佐々木德雄	
18	〃・上荒町	低位丘陵 南斜面	土師器、須恵器	奈良～平安	佐々木尚見	
19	〃・長根	低位丘陵 南斜面	土師器	奈良～平安	佐々木尚見	
20	〃・野沢	丘陵平坦面	土師器、須恵器、鐵斧	不 明		
21	〃・神田	丘陵北斜面	土師器、須恵器、瓦	奈良前半	佐々木德雄	堅穴?
22	〃・四ツ塙	丘陵平坦面 南斜面	須恵器	奈良～平安	佐々木德雄 門脇	
23	〃・伊勢堂	丘陵北斜面	土師器、須恵器	奈良～平安	散 逸	
24	〃・勘訪原	丘陵平坦地	土師器、須恵器	奈良～平安	散 逸	
25	〃・二ツ谷	丘陵平坦地	土師器、須恵器、 土製文筒	奈良後半	柴田	堅穴1株
26	〃・泉谷	丘陵末端	土師器、須恵器	奈良～平安	佐々木德雄	
27	藤沢・下山	丘陵南斜面	須恵器、土師器	奈良末～平安 中期?	二上 銀雄	煙滅
28	〃・大森山	丘陵腰線	須恵器	奈良末	佐藤 信行	古墳?
29	〃・五輪堂山	丘陵頂部	土師器、須恵器	平安	佐々木德雄	堅穴1株
30	〃・菜沢西	丘陵斜面	土師器、須恵器	古墳後期 ～奈良初	佐々木尚見	
31	〃・中山	丘陵腰線	土師、須恵、鐵刀子 燒米、筍果	平安	佐々木、佐藤	堅穴数株
32	〃・長者原	丘陵平坦面	土師、須恵、鐵斧 石製模造品	奈良～平安		
33	高清水町大寺	丘陵平坦面		古墳前～奈良		
34	〃・下折木	丘陵急斜面	土師、須恵	平安	町教委	堅穴1
35	〃・折木山	丘陵頂部	銅印	平安	高清水町教委	

瀬峰町内の奈良・平安時代の主要遺跡

富丘陵

薬沢東遺跡

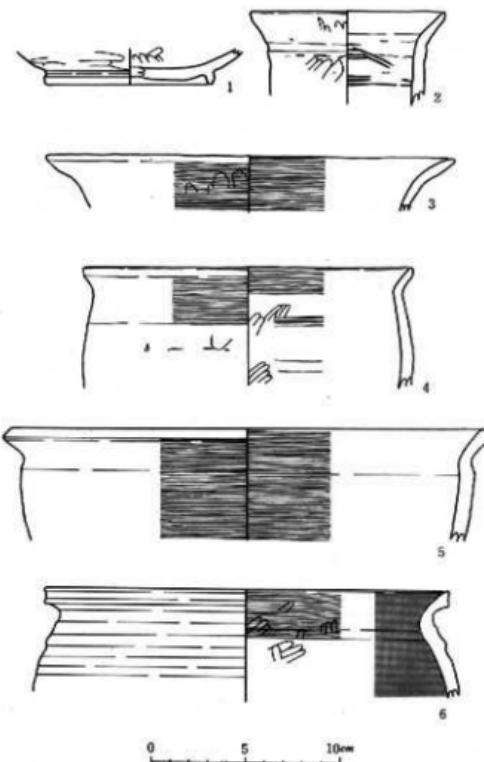
富丘陵の西端、高清水町と境を接する地点にある。丘陵の陵線上に数地点があるが、出土遺物にはほとんど相違が認められないので、大きく一つの集落遺跡として扱う。遺跡の東端付近から須恵器の長頸壺（第4図8）が単独に近い状態で採集されている。また、数年前の開田の際焼土遺構が数ヶ所で発見され、多量の土師器、須恵器片が採集されている。その大部分は、平安時代初期と考えられるが、遺物中に平安時代後半に下りそうな台付壺や、底面が大きくヘラキリ、ヘラナデの再調整を行った須恵器壺（奈良時代後半に属する）等も出ている。

がんげつ遺跡

表題の遺跡であるが、通称“がんげつ”はかなり広大で、佐々木氏等は6地点に分けている。遺跡は主に丘陵の陵線上と南側斜面に形成されている。

がんげつ遺跡から従来採集された遺物には、土師器、須恵器、藏手刀、勾玉、瓦、鉄器、鐵滓、繩文土器、石器等がある。発掘以前に遺跡東部地区から採集された土師器は、ほとんどが奈良時代後半に属する（第6図）。

また、平瓦片もその技法、文様から多賀城二期に相当し、やはり奈良末期に比定しえる。しかし、遺跡西部及び南部斜面（発掘地点付近）には、平安時代にさがるものが多く、繩文時代を除いて、がんげつ遺跡は、奈良時代後半、平安時代前半の2期

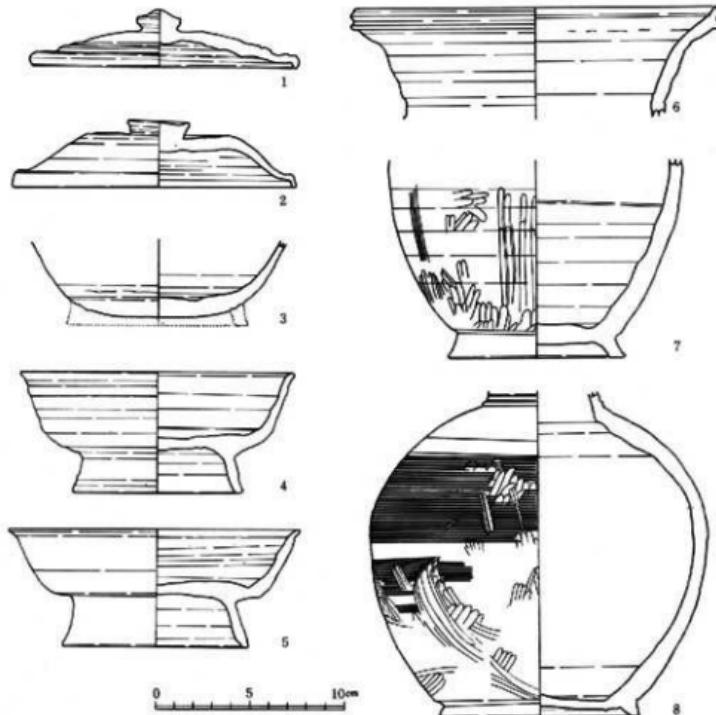


第3図 瀬峰町内出土の土師器
1.3.5 中三代 2.4.6 坂ノ下裏1

にわたる事は確実である。また、薙手刀、勾玉等の発見遺物及び、かって丘陵線線上に径8~10m前後のマウンドがあったという点（佐々木徳雄教示）等から、今は消滅した高塚古墳の存在も考えられる。

坂ノ下裏I遺跡

がんげつ遺跡の東南に位置する。本遺跡と陽岩寺裏、坂ノ下裏II遺跡とは、本来大きく一つの集落と見ることができるが、ここでは一応、佐々木氏等の線引に従う。数年前の苗圃造成によって多量の土師器、須恵器片が採集され、削平面に方形の落込みが幾つかあったという。現在でも落込みらしいものや、黒土中に焼土が混じている場所がある。出土土師器には図示した小型甕、壺等の他、普通の甕の破片も多い（第3図6）。



第4図 潤峰町内出土の須恵器
1~5 四ヶ塙原 6 坂ノ下裏I 7 四ヶ塙原 8 基沢東

須恵器には壺と甕がある。壺は底部が回転ヘラケズリ非調整のものと、回転ヘラケズリ、回転ナデ等の再調整の行なわれた二者がある。以上の土師器、須恵器は、奈良時代末と考えられるが、中にロクロ使用の土師器甕があり、これらは平安時代に属する。

清水山遺跡、長者原遺跡

瀬峰小学校の裏門付近の道路のカッティング面に、竪穴住居跡1棟が露出しており、佐々木尚見氏がここから3点の土師器、須恵器を採集している。土師器は、体部下部に長い段を持つ内面黒色の壺で、須恵器壺は、底面の切離しは不明だが、再調整は手持ちヘラケズリによっている。共に奈良時代後半のものと考えられよう。

この地点の北方150mの地点でも、かって竪穴住居跡が発見され、完形の土師器、須恵器の出土もあったという(中川前教育長の教示による)。また、小学校裏門北側地点でも、宅地造成の際、竪穴らしき遺構や、土器類の出土があったと白鳥伝氏等が話しているので、これらは一連のかなり広汎な遺跡であったと考えられる。

また、町道線を挟んで、下藤沢、長者原遺跡がある。長者原は、その昔、長者の住んだ場所と伝えられている。この地区からは、現在、土師器、須恵器の細片しか採集できず、開拓が他地区よりも早かったため、遺構、遺物の大半は既に破壊、埋滅したものと考えられる。

荒町丘陵

荒町遺跡

小山田川南岸の低い丘陵上に位置し、虎渓寺付近を東端として北、西に延びる広汎な地域に土師器、須恵器の散布が見られる。出土土器が細片化していて、正確な時代判定は難しいが、古墳時代中期の土師器片や、中世(鎌倉時代頃)の古瀬戸破片等を確認した。他の土器片の多くは、奈良・平安時代に属するものと推定される。

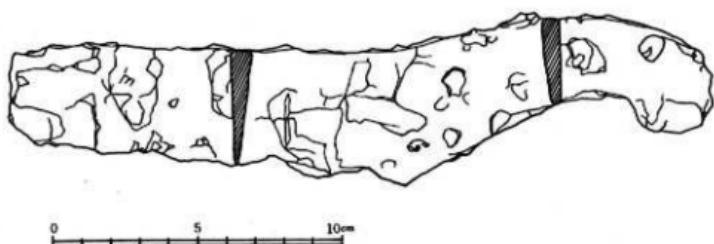
三代遺跡

名勝“ゆるぎの松”的近く、沖積地に面する低い丘陵上に占地する。遺跡の範囲は、それ程広くないらしいが、道路カッティング面に2棟以上の竪穴住居跡が露出している。採集遺物には土師器甕、高台付壺等があり、甕には整形にロクロを使用したと思われるものがある(第3図1.3.5)。

四ッ塙丘陵

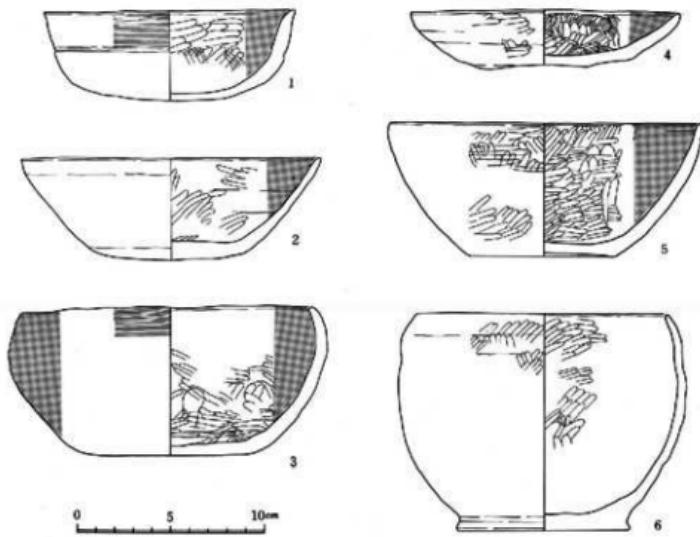
神田遺跡

四ッ塙丘陵の北斜面にあり、地目の大部分が田地であるため、正確な線引はできないが、遺物の散布状態等からかなり広範囲の遺跡と見てよい。採集遺物は、多量の土師器、須恵器小片に混じて平瓦片、重弧文軒平瓦片(多賀城第1期)等がある。なお、この軒平瓦には、瓦窓跡



第5図 がんげつ遺跡出土の素手刀

今次発掘した整穴道横から100m西の畠より出土
現長 24.5cm 元幅 4.8cm 柄長 9.5cm
平造り平棟 柄先半月型(?) 第1型式



第6図 がんげつ遺跡の表採土飾器

1~6 国分寺下層式(8世紀後半代)

出土瓦にまま見られるように、瓦の割れ目、縫ぎ目に焼土がぎっしり食い込んでいる。本遺跡と指呼の位置にある田尻町木戸瓦窯跡との有機的関連を示す遺物と考えることもできる。

また、かつて、この付近から開田の際多量の瓦が出土したという情報もあり、本遺跡が斜面に形成されていることなどとも相俟って、瓦窯跡に関連する遺跡と考えることも可能である。

四ッ塙遺跡

四ッ塙丘陵中央部の南側にも、遺物の集中的に見られる地点がある。地形、出土遺物にはほとんど変化が見られないで、ここでは広く四ッ塙遺跡と呼ぶ。

平坦部にあるⅠ地点からは、高台付壺、壺蓋等の完形品と壺蓋、甕破片等、須恵器のみ一括採集されている(第4図1~5)。「樹形」付近からは、高台付壺、長頸壺、甕等の須恵器破片のみが一括採集されている(第4図7)。両地点がともに須恵器のみを出土するという点で一般集落と異なる性格の遺跡(例えば、古墳、須恵器、官衙跡)を考えることもできるが、いずれも表探資料であり今後の調査に待つ他はない。出土須恵器はいずれも奈良時代に属する。

下富前遺跡

小山田川氾濫原中にある遺跡で、遺構は確認されていないが、かなり広範囲に遺物の散布が見られる。出土遺物には、土師器、須恵器、中世陶器、フィゴ羽口?等がある。時期的には、奈良時代末、平安時代前半、中世の3時期にわたることが確認され、このような低平な地に断続的ながら長期にわたって遺跡が存在していることは興味深い。

遺跡立地の変遷

楽原地方の縄文時代遺跡は、栗駒山麓に源を発する河川の上流地域、あるいは自然堤防上や下っては伊豆沼、内沼等の湖沼周辺等に大きく遺跡の片寄りが見られ、その中間地帯の河川に沿って発達した丘陵地帯には、余り良好な遺跡は形成されていない。それは水利、眺望、食料資源というような人間居住の絶体的条件のいずれかを満たしていなかったからではないかと考えられる。一方、当時は、人口密度も低く、住的環境を選択するに足る十分な居住空間があったこと等も、縄文期の遺跡偏在の一因であったと考えられる。

弥生時代に入ると、前半と後半では全く立地を異にする。前半期では、比較的平坦な自然堤防等を選択するが、後半期になると、河川上流地域の山地、あるいは丘陵の頂上部にはね上ってしまう。

古墳時代になると、河川上流地域にはほとんど遺跡の分布が見られず、河川下流域の微高地または、沖積地に望む台地端部等を選地するようになる。

奈良・平安時代になると、主に河川下流域の丘陵上や自然堤防上に立地するようになる。

つぎに瀬峰町内の奈良時代以前の遺跡立地についてふれておこう。

瀬峰町内には、奈良時代以前の遺跡は極めて少ない。縄文時代の遺物は、薬沢東、がんげつ、鼻欠遺跡等数ヶ所の遺跡から発見されてはいるが、縄文期の単独遺跡としては、今はほとんど壊滅したと考えられる泉谷鼻欠遺跡のみであろう。弥生時代の遺跡も、現在のところ未発見である。ただ、大鷲谷地内から弥生時代にともなうアメリカ石器が発見されているので、付近に弥生時代遺跡の発見される可能性はある。つぎの古墳時代に入ても、その初期のものが最近、泉谷遺跡や上荒町遺跡等の微高地性の遺跡から、土師器類がわずかに採集されているにすぎない。古墳後期から奈良初期にかけての遺跡は、町内では明確でないが、最近調査された高清水町観音沢、志波姫町御駒堂遺跡等の立地から丘陵平坦部に、奈良時代後半に入ると、一応微高地や丘陵の平坦面等の地形を原則としながらも、かなり傾斜のきつい丘陵斜面や沖積地にまで、その居住立地条件を拡大していく傾向が強くあらわれてくる。

最近の県北地方の行政発掘を見ると、他時期の遺跡に比較して、奈良末～平安時代の集落遺跡が圧倒的に多い。これは、最近の行政発掘の大半を占める縱貫道、新幹線の路線が、奈良・平安時代遺跡の立地と一致するという偶然も一因であろうが、やはり、この時代の集落の急激な増加現象を示すものと考えられる。

このような遺跡の極端な増加現象と、先に述べた居住選地条件の拡大とは、表裏一体の関係にあったのではないかと考えられる。そこには、人口増加→集落数増加→未耕地の開拓及び既耕地の再開拓→居住条件の拡大、という相関関係が指摘できる。

さて、当時の経済情勢からみて、当然、がんげつ遺跡の人々も、基本的に稻作農業を主体的な生業としていたと考えられる。

ところで、遺跡の立地する寺沢丘陵と沖積地との比高は50～30m前後あり、当時の技術をもってしても、丘陵上への揚水は無理であろう。ただ、丘陵間に形成された狭隘な湿地帯での小規模な水稻農業は可能であったと思われる。寺沢丘陵の後背には、瀬峰川によって形成された幅300m～400mの沖積地がある。さらに寺沢丘陵の南面には、小山田川によって形成された約1km前後の幅広い沖積地が控えている。その長さは、高清水町大寺付近から泉谷まで続き、おそらく、泉谷鼻欠遺跡付近から東は、当時、旧薦栗沼の遊水池であったと思われる。

おそらく、がんげつ遺跡のみならず、寺沢丘陵、荒町、四ッ塙丘陵に所在する遺跡の人々はこの小山田川によって形成された沖積地に、主たる農業生産の場を求めていたであろう。

(佐藤信行)

II 調査経過

1 発掘に至る経過

これまでの調査

藤里村誌上巻（大正11年発刊）富村の部（現在の行政区で、上富、下富、官小路原の区域をいう）に、「後方山林は、いづれも畠の形をなせり、往古、富川（現在の小山田川をいう）沿岸の田地は沼なりしにより、畠により生活の途を立てたりとの伝説あり、荒廃せし時代詳かならず、…尙山林開墾の際、土器の破片を発掘することあり」という記述があるように、古くから、この付近一帯からは、土器が出土するということで知られていた。

昭和35年から41年まで、瀬峰町史続編の編纂の際、宮城教育大学教授平重道氏や横堀照氏等によって町内の遺跡調査が行われた。その成果は、横堀照氏の研究論文「瀬峰町の古代遺跡についての研究」として、町史に掲載されている。この論文で、がんげつ遺跡については、奈良・平安時代における遺跡であることが明らかにされたのである（註）。その後、昭和46年にがんげつ一帯の地形が採草地として最適地である、ということで、酪農近代化計画の基盤整備事業としてとりあげられ、酪農家の共同事業による団体當草地造成工事が行なわれたのである。

大型ブルドーザー数台によって、整地工事が進められた。この工事で、おびただしい土師器、須恵器が出土したという。この工事を知った町文化財保護委員の二上鎮雄翁が現地に駆けつけた時は、既に大方の整地工事が済んだ後で、一帯に散乱している土師器、須恵器の破片を表面採集しただけであったという。

それから2年程したある日、上富部落の佐藤司氏が、農作業の帰途、この遺跡の丘陵頂部の工事跡から、鋤びついた一本の蕨手刀（第5図）を発見したのである。この蕨手刀の発見によって、「がんげつ遺跡」は、あらためて重要な遺跡として注目され始めたのである。

昭和49年5月、町文化財保護委員と瀬峰郷土研究会員による「がんげつ遺跡」の合同調査が行なわれた。現地は、約3000m²の採草地になっていた。削平の程度は、中腹部で40cm位で、主にこの地点からの出土遺物が多かったのではないかと推定された。斜面の平坦部分は、10~20cm位の削平が行なわれた程度で、遺跡の損壊は軽微であろうと推測されたが、丘陵頂部の寺沢町道に通ずる採草地内の兩個農道に一棟分の堅穴住居跡らしい遺構の一部が検出されたこと、又、採草地北側の山林内の農道切土面にも、堅穴住居跡らしい輪郭が2ヶ所、はっきり検出された。

このがんげつ一帯の丘陵斜面の畠からも、土師器（第6図）、須恵器の破片が採集されたこと等から、がんげつ周辺は、奈良・平安時代の大規模な集落遺跡ではないかと推測された。更

に、薙手刀発見地点が丘陵の頂部にあたる状況から、この薙手刀は、おそらく、丘陵部に築営された、奈良・平安時代の古墳の副葬品ではないかということであった。

この周辺一帯の地形は、斜面のゆるやかな台地で、地理的にも恵まれた環境にあるため、昭和35年頃から開田、採草地として開発されてきた。その度毎に貴重な遺跡が、その内容、規模、学術的価値も究明されずに滅失してしまったことは、郷土にとってかけがえのない文化的遺産の損失であるといわねばならない。

発掘までの経過

合同調査の頃末は、文化財保護委員会から町教育委員会に逐一報告された。そして、採草地の農道面に検出された竪穴住居跡が、採草地の改良更新計画のため、将来再びアルドーザによつて削平されるやも知れず、遺構が損壊されるおそれが充分予想されたこと、このままの状態で遺構を保存することが極めて困難であると認められることから、学術的な究明のためにも、遺跡の発掘調査を県教委に申請してはどうかと町教委に要請した。

がんげつ遺跡発掘調査についての協議が、町文化財保護委員会においても熱心に行なわれた。昭和50年4月、両委員会で種々協議を重ねた結果、「がんげつ周辺の広汎な遺跡の性格を把握して、今後の保存対策を講ずる一環として、学術的発掘調査を実施したい」旨の発掘申請が町教育委員会教育長中川浩之より文化庁長官あて、県教育委員会を経由して、申請された。申請の要件とされた地権者の承諾も高橋忠義氏の理解ある協力によって、事なく運ばれたことを特記したい。

同年5月文化庁長官より、町教育委員会教育長あてに「文化財保護法の趣旨を尊重され、慎重に実施されたい」旨の条件を付して許可されたのであった。 (佐々木徳雄)

註 構要照「瀬峰町の古代遺跡についての研究」「瀬峰町史(全)」1966 所収

2 発掘経過

発掘調査は次の要項で実施した。あわせて発掘の経過を略記する。

調査の要項

- 1 遺跡所在 宮城県栗原郡瀬峰町字上富岩石7-12
- 2 調査期間 昭和50年5月17日～同年5月29日 延7日間
- 3 発掘面積 80m²、 竪穴住居1棟
- 4 調査主体 宮城県栗原郡瀬峰町教育委員会
- 5 調査担当 宮城県古川工業高等学校教諭 日本考古学协会会员 三宅宗議
- 6 調査員 日本考古学会員 佐藤信行

宮城県染館女子高等学校教諭 金野 正
宮城県古川工業高等学校教諭 鶴田勝彦
宮城県古川工業高等学校助手 桜井幸喜
瀬峰町文化財保護委員会委員長 瀬峰町郷土研究会長 高橋龟寿吉
瀬峰町文化財保護委員 二上鉄雄 後藤 東 笹川トミコ
瀬峰町郷土研究会会員 佐々木徳雄 佐々木尚見 高橋純一郎
千坂康之 加藤 優 鈴木寅義 高橋富雄
瀬峰町役場職員 鎌田淑雄 高橋照義
一般 若松金男 鈴木運作

7 調査参加・協力者

高橋忠義（地権者） 後藤哲弘 鎌田里見 村岡一郎 山田和子
後藤きよ子 佐々木いさこ 佐々木みよ 佐々木義一
高橋工務店 瀬峰モータース

8 事務局 瀬峰町教育委員会教育長 中川浩之

瀬峰町公民館長 白鳥 伝
瀬峰町教育委員会事務局長 鈴木恭和
瀬峰町教育委員会社会教育主事 片倉芳郎 佐々木 久 高橋達雄

発掘の経過

5月17日（雨） 午前8時～午後6時

午前7時、古川勢到着。同8時、瀬峰町公民館に集合、車に分乗して現場に行く。9時、作業開始。まず繩張りを行ない、南北に細長く $10\text{m} \times 6\text{m}$ の発掘地を設定、十字に畦を残して、 $4\text{m} \times 2\text{m}$ のグリッドを4つ作りA～D地区とする。表土を剥いでいくと、発掘区のはば中央に、黒色の落込みの輪郭が現われ、それは更に西側に延びていることが判明した。そこでC、D区の西に 2m 四方のグリッドを4つ設けE、E'、F、F'区とする。

午前中から雨が降り、一時強くなって中断するが、止みそうにないので終日、雨の中での調査となった。参加者25名。本日、表土中からの出土遺物は少ない。

5月18日（快晴） 午前8時～午後6時30分

黒色の落込みは、ほぼ方形の竪穴遺構を示すことが判明した。遺構確認面は、黒色土上面である。壁のコーナーを追求するがはっきりしない。発掘作業に平行して遺跡付近の地形測量を行なう。本日、褐色土層中からの出土遺物が多い。一括土師器に密着して打製石錐1点出土。参加者23名。

5月22日（晴）

本日、作業は休み。午後3時頃、宮城県教育委員会文化財保護課技術主査佐々木茂樹氏、宮城県多賀城跡調査研究所研究員桑原滋郎氏が来跡。

5月24日（晴） 午前8時～午後6時30分

竪穴の北側のコーナーを確認するが、西半分のコーナーが確認できないので更に西側へ拡張の準備。既グリットの発掘はほぼ床面に及ぶ。床面は比較的平坦でかたくしまり、しっかりとしている。2カ所に焼け面も確認されたが、カマドは見当たらない。

B区周溝に沿ったピット1から耳皿出土、D区からも1点出土。参加者23名。

5月25日（晴） 午前8時30分～午後7時

今日は2班に分かれ、1班は残っていたE'、F'地区の発掘作業にかかる。他の班は平面図作成の準備。午後3時頃まで発掘作業及び畦の取り外し作業完了、床面清掃及びピットの検出につとめる。ピット21脇から鉄鎌出土。全員が5班に分かれて、住居跡の平面実測とセクション取りを行なう。

5月26日（晴） 午前6時30分～午前9時30分

昨日取り残した平面図取り、一応完了。佐藤、佐々木（徳）、片倉、佐々木（久）

5月29日（晴） 午前8時～午後5時30分

佐藤、佐々木（徳）等4名は朝6時30分から平面図の一部取直しを始める。

8時、参加者集合。

平面図の検討と同時に、貼り床層の確認のため、部分的に床面を剥ぐ。東側中央腰寄りにあった焼土（厚さ5～10cm）を剥ぐと周溝が現われ、部分的にせよ遺構の補修が行なわれた事が確認された。更に、南コーナー付近の床剥ぎを拡大していくと、床面下5～10cmの深さから、土師器、羽口等が出土。

貼り床面を検討した後、埋め戻しして5時30分、すべての調査終了。参加者29名。

（佐藤信行）

3 発掘後の経過

がんげつ遺跡発掘調査終了後のあらましを、遺構、遺物の公開と遺跡保存を中心に述べる。さて、今回のような学術調査は当町として初めてだったので、発掘中はもとより、その成果などについて、各方面の方々に多大の关心を与え、私なども会う人ごとに、いろいろ質問をいただいた。しかし、発掘終了と同時に、これについての価値的判断が下せるものでもなく、ともかく「貴重な住居跡らしく、出土遺物にも相当の研究価値がある」という程度のものが、まずもって私自身の理解であった。

それにしても、この作業の状態を振り返ってみると、当初2日間の予定であった仕事が、最終的に延7日間を要し、動員労力150人を越える大仕事になろうとは思ってもいなかった。これ

は、発掘価値に伴なう作業量の増大に帰するものであり、この間におけるより多くの人々からの労働協力は勿論、飲食の手配、器具器材の購入借用など、大は運搬車輛から小は消耗資材の都合に至るまで、数々のご援助をいただいたことは、いまさらにして頭の下がるばかりである。発掘終了後の跡始末業務に関しては、町文化財保護委員会を中心に、毎日のように続いた。

まず、遺構の公開。発掘中ではあったが、5月25日、一般公開。瀬峰小学校の団体見学をはじめ、町民多数が見学に訪れた。

そして、恒例の文化祭の時期が迫ってきた。「文化祭行事の中で、がんげつ遺跡発掘の出土品等を展示観覧させてほしい」との要望が多くの町民から出て、公民館はこれを企画して、展示公開することになった。町文化財保護委員、郷土研究会員各位のご協力のもとに、11月1日より3日間、瀬峰町公民館視聴覚室を展示室にして「瀬峰町考古資料展」は開催された。がんげつ遺跡出土品の外に、町内各所より発見された出土品をも加え、東北歴史資料館より貸借した各種パネルや図表などが、室内いっぱいに配置されたので、小規模ながらもほぼ満足できる展示となった。これらのことばはすでに広報されてあったので、開館と同時に人気も上々、多くの人々が訪れ、篠川トミコ氏、役場企画課の協力で用意した展示案内のパンフレットがまたたく間に品切れとなつたほど盛況で、当事者一同の大きな喜びとなつた。

いずれにしても、町民各位の、考古学への理解は、こうした事どもによっても、高まり深まつたことは言うまでもなかろう。町教育委員会は、この点も考慮して、当該地域の保護対策を立て、文化財保護委員会に諮り、地権者の承諾を得、51年度文化財保護事業の中で、南北の幹道には案内標柱を、現地には説明板の設置を行なつた。

ことここに至るまで、一方における学術的検討の努力は、この報告書の内容が示すとおりであり、これが当町の古代史解明への大きな手がかりになるであろうことを、改めて確信し、よろこびとする。

(白鳥 伝)

III 遺構の検出

遺構の確認 丘陵の南むきの斜面に、東と南とを小さな谷で区切られた緩い平坦面があり、各所に土器の小破片が散在する。その中で最も散布の多い区域に、農道に平行して $10m \times 6m$ の発掘区を設けた。発掘区の中央付近で南側にかけて、地表で約15cmの深さで黒色の落込みが現れた。落込みの土は表土である。遺構の輪郭が確認できたのは表土下の黒土層（第2層）である。調査の過程で発掘区はさらに広がり、8グリット、80m²が調査範囲となった。

堆積土 検出遺構の全域にわたって堆積土が残っていたが、西側の農道付近には部分的に堆積土の擾乱、流出がみられた。保存のよい中央付近の層序は次のとおりである。

第1層：表土。黒色を呈し軟かい。

第2層：この表面で遺構を確認した。黒土層である。やや褐色ぎみで、部分的に黄褐色の微細な斑が入る。粘性がある。

第3層：褐色土層。粘性がある。

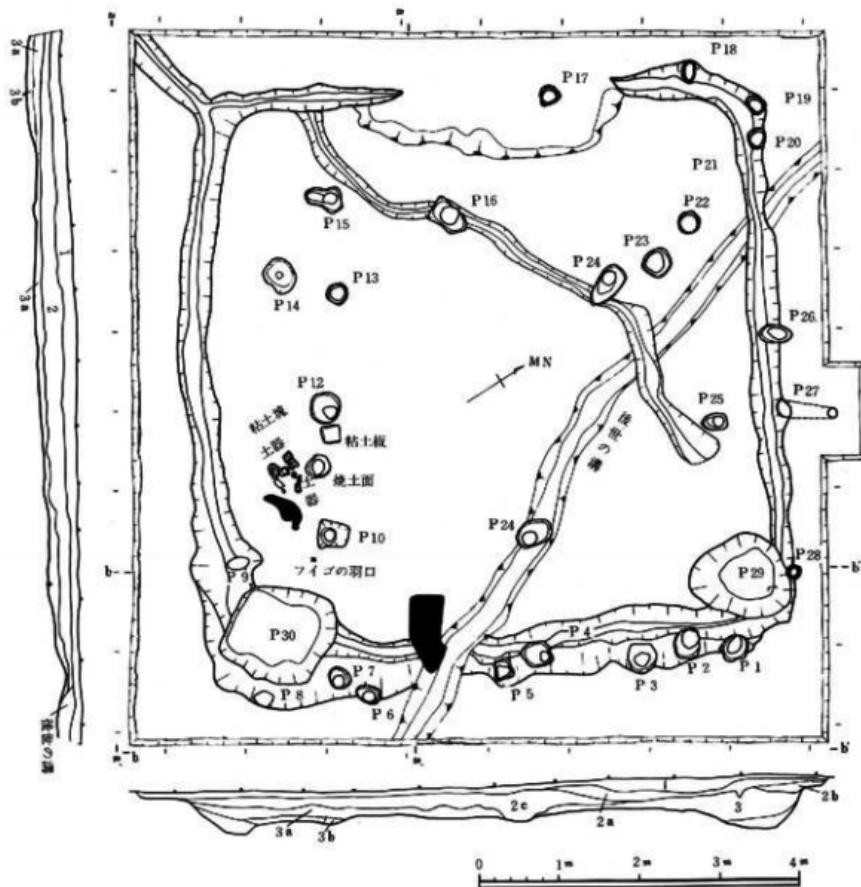
第4層：黄褐色土層。微細な赤色の石塊や炭化物が混じる。床面直上数cmの堆積層である。

第5層：赤褐色土層。焼土、炭化物、鉄滓等を含む固い層。貼り床層である。

遺構プラン 周間に方形に溝が巡る竪穴遺構が1棟、検出された。遺構は南北に走る新しい溝（底幅40cm）によって2分されているが、全体として保存状態はよいほうである。遺構の4つのコーナーは、だいたい東西南北方向にあたる。遺構の面積は約 $7m \times 20m \times 7m = 60m^2$ で、東西幅がやや大きい。遺構の北コーナーと南コーナーには比較的大きなピットがあり、また周溝や床面には小さな深いピット群がある（第7図）。

床面 床面は地山の黄褐色のシルト質粘土層を掘り、その上に赤褐色の粘土を平らに貼って叩きしめている。底面のレベルは、壁の立上りが最も高い東コーナーで地山面から約30cm下る。床面は西側と南側に向かって緩く傾斜し、東コーナーと西コーナーの比高差は約20cmであった。床面に貼られた赤褐色の粘土は、表面観察によればほぼ遺構全体に及び、2カ所に焼け面がみられた。貼り床層の検出は部分的にしか行なわなかったが、その限りでは、粘土層は微細な炭化物と焼土塊を含んでいる。層の厚さは均一でないが5~10cmである。北西側は貼り床の痕跡が薄くなり、地山との区別がつかない。

周溝 遺構の周囲を区画する周溝は方形だが、隅丸気味であり、また北西側が途切れている。溝の上幅は平均40cm、基底幅が10~20cmで、壁面が直線的であるが、最も保存のよい東南側の周溝は壁面に1つの段落があり、上幅も60~80cmと広い。段落部分での溝幅は約40cm。上段の壁面に柱穴ピット列がある。全体に、周溝の深さは床面から10cm程度で、あまり深くない。な



第7回 造構実測図

層序	b - b'
a - a'	
第1層	表土——第1層
第2層	墨色土——第2 a + b · c 層
第3 a + b 層	褐色土——第3 a + b 層
第4 層	黃褐色土——第4 層
第5 層	貼り床——第5 層
b - b' の層区分	はピットを除く
ピットの准積層	は第8 図、第9 図に示す

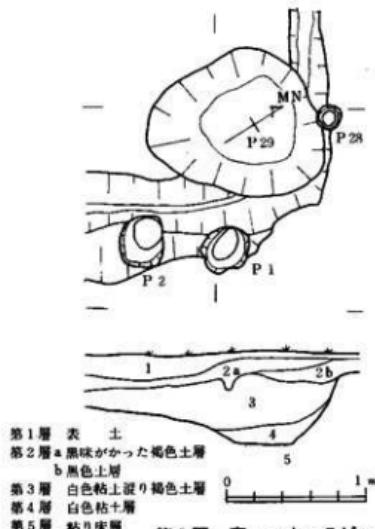
お周溝の一部に、後で記すように修復の痕跡がみられた。

その他の溝 床面の中央やや北寄りに浅い溝が不規則に走っている。この溝の確認面は床面直上の堆積層（第4層）の上面であるので、造構に関係すると思われる。性格は不明。

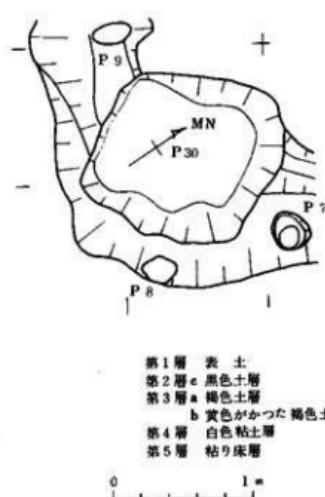
また、ほぼ南北に床面を切る直線的な溝は、褐色土層（第3層）の上面から掘り込まれていて、造構に直接関係しない。

ピット 東コーナーと南コーナーに、ほぼ楕円形をなし、すり鉢状を呈する底の深いピットがある。東コーナーのP 29（第8図）は、床面から約20cmで底に至る。このピットは上端の一部がコーナー部分の周溝の底面下に入っている。このピットが周溝の新設または補修に当って埋められたことが分る。南コーナーのP 30（第9図）は床面から15cmの深さで底に至る。底面で地山があらわれているが、壁面には赤褐色の固い粘土がみられる。造構床面の貼り粘土と同じである。P 29、P 30とも、底面近くに白色の凝灰質の水成堆積層がある。

P 1からP 28までのピットは床面と周溝壁面から検出されている。床面のものは第4層黄褐色土層の上面で確認されており、貼り床を剥がして見つかったものはない。これらのピット群のうち、掘り方と柱痕とが識別できたものが24穴にのぼり（第2表）、一応柱穴とすることができる。ただ、柱底は直径も深さも一樣でないので、さらに検討を要する。なお柱痕をのこすピットの中で、柱の抜き方を遺存するものはP 15、P 17、P 22、P 25である。



第8図 東コーナーのピット



第9図 南コーナーのピット

カマド 造構の東側の周溝付近に焼け面があり、カマドの存在が予想されたが、新しい溝で破壊されており、確認できなかった。焼け面の面積は40cm×50cmほどである。

特殊遺跡 造構の南コーナー付近に焼け面があるが、その付近で平坦な床面に赤色の粘土塊が数個置かれ（第10図）、間には挿まれた形で土師器の高台付窯（第15図1）が倒位に置かれていた。床面には炭化物が若干みられた。また粘土塊付近に2個の柱穴状ビット（P11、P12）があり、それに挿まれた形で台形の粘土板が床面に置かれていた。粘土板は上端幅17cm×下端幅21.5cm、長さ20cm、厚さ4～5cmで、黄白色に焼かれて固くなっている（図版4参照）。

重複 周溝の東側部分で造構の重複が認められた。周溝の南寄りの焼け面は厚さ10cmで、これを剥ぐと周溝が現れた。また東コーナーではこれとは逆に、貼り床によって作られた周溝を除いたところ、その下部からP29のビットが現れている。東コーナーの床面は白っぽい粘土質の

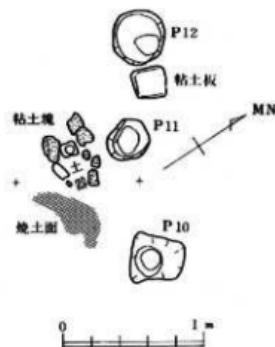
第2表 ビット一覧 単位cm (P29、P30を除く)

	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14	
場所	周溝	周溝	周溝	周溝	周溝	周溝	周溝	周溝	床面	床面	床面	床面	床面	床面	
振り方	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり	回み
径	3.4	30～40	3.6	30～40	2.4	24～32	26～30	26	18～28	30	30	40	28	42	
深さ	4.1	5.7	4.4	4.1	1.9		3.4			1.8		1.0	4.0	10.7	
柱痕	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり	なし	あり	あり	あり	あり	あり	なし	
径	1.6	2.2	2.0	1.2	1.8	1.4	1.6		1.0	1.6	2.0	1.6	1.8	?	
抜き方	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	
備考	土師 窯	土師器 「中」													
	P15	P16	P17	P18	P19	P20	P21	P22	P23	P24	P25	P26	P27	P28	
場所	床面	床面	床面	周溝	周溝	周溝	床面	床面	床面	床面	床面	床面	周溝	周溝	
振り方	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり	
径	3.4	28～50	30～56	16～28	18～28	24	28	28	30～58	30～44	20～32	22～40	16～22	16	
深さ	2.7	5.6	2.4	1.4	3.8	3.4	4.3	2.4	5.7	?	3.9	6.3	3.9	3.7	
柱痕	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり	あり	なし	あり	
径	1.2	2.2	1.8	1.2～2.4	1.4～2.0	1.6	1.6	2.4	1.8	2.0	1.4	1.2～2.4		1.0	
抜き方	あり	なし	あり	なし	なし	なし	なし	なし	あり	なし	あり	なし	なし	なし	
備考	炭化物 漏水						土師器 上層器	炭化物 漏水				須恵器 壺	植に 入る		

土でかさ上げされており、そのとき周溝を部分的に補修したものであろう。また床面と周溝壁面のピット群から推測して、少なくとも3棟の建物の重複が認められるが、これについてはV考察で改めて触れる。

年代決定資料 貼り床層、床面、周溝、ピット内および床面直上の堆積層内の遺物はこの造構の年代に関する資料とみることができる。

貼り床層から出た土師器壺（第13図3、図版9-7）、土師器甕（第17図2）、第18図1、第18図3、第18図4、第8図6）、土師器鉢（第20図1）は、床貼りの時期の下限を推定する資料となる。床面出土の土師器壺（第14図3・図版7-3）は造構床面の使用期間または廃絶後間もない時期を想定する資料である。赤色粘土塊からなる特殊造構から出た土師器高台付壺（第15図1）も、その造構の使用時期ないし廃絶当時を推定する資料となるだろう。柱穴ピットP1出土の土師器壺（第14図7、図版8-1）、P2出土の「中」の線刻ある土師器壺（第21図1、図版8-3）、P5出土の耳皿（第16図2、図版10-2）、P26出土の須恵器甕（第12図1・図版6-2）も、同様の資料となると思われる。また、床面直上に堆積した黄褐色土層（第4層）の遺物も、上に準じて年代推定資料となると思われる。これらの資料については、IV遺物およびV考察のところで述べる。



第10図 南側の特殊造構

（桜井幸喜・三宅宗議）

IV 遺 物

1 遺物の出土状況

堆積土の層序は、基本的に5層から成り立っているが、遺物の取上げに当っては表土（第1層）、黒色土層（第2層）、褐色土層（第3層）、黄褐色土層（第4層）、床面（直上・ピット・古溝）、および貼り床層（第5層）に区分して行なった。

各区の層位別土器出土状況は第3表のことおりである。以下、表により土器出土状況を概観する。土師器は層位別に見ると褐色土層（第3層）からの出土が圧倒的に多く、全体の60%強を占め、次いで黒色土層（第2層）、黄褐色土層（第4層）、床面直上の順となる。区各にはそれほどの差は認められず、平均的に分布している。土師器は褐色土層（第3層）、黄褐色土層（第4層）、ピット等、より下層から出土するものが完形に近い傾向にある。土師器の総出土

第3表 層位別土器出土一覧

層序 △ 区	A	B	C	D	E	E'	F	F'	計
表 土（第1層）									14
黒色土層（第2層）	41	34	109	20	6	29	9		248
褐色土層（第3層）	214	258	238	238	92	169	98	152	1,459
黄褐色土層（第4層）	4	12	30	16	5	5	24	1	97
床 面 直 上			2	1					3
溝	25	24	24		5	4			82
ピ ッ ト	19	26				1	4	8	58
貼り床層（第5層）	7	2	29	14	24	22	3	27	128
計	310	358	431	293	133	229	142	180	(2,090)

須恵器

層序 △ 区	A	B	C	D	E	E'	F	F'	計
表 土（第1層）									16
黒色土層（第2層）	5	2	16	3		7	2		35
褐色土層（第3層）	6	7	15	7	5	15	4	13	72
黄褐色土層（第4層）							2	6	8
床 面 直 上									
溝				2					2
ピ ッ ト	2	1							3
貼り床層（第5層）									
	13	10	33	10	5	22	8	19	(136)

点数は2090点である。

次に、須恵器は土師器に比べて出土量が極端に少なく、土器總出土量のわずか6%にすぎない。層位的に黒色土層（第2層）、褐色土層（第3層）が相半ばして大部分を占め、下層からの出土は散発的であった。ただ、P26の中から甕の大形破片が出土している。

鉄器、鐵滓等は各区から散発的に出土し、特別な出土状態は認められなかった。ただ、鐵鎌等は、比較的床面に近い層位から多く出土するように見受けられた。また、第3層や第4層の中に、鐵製品の土化したと思われる土塊がかなり認められた。

（佐藤信行）

2 出土遺物

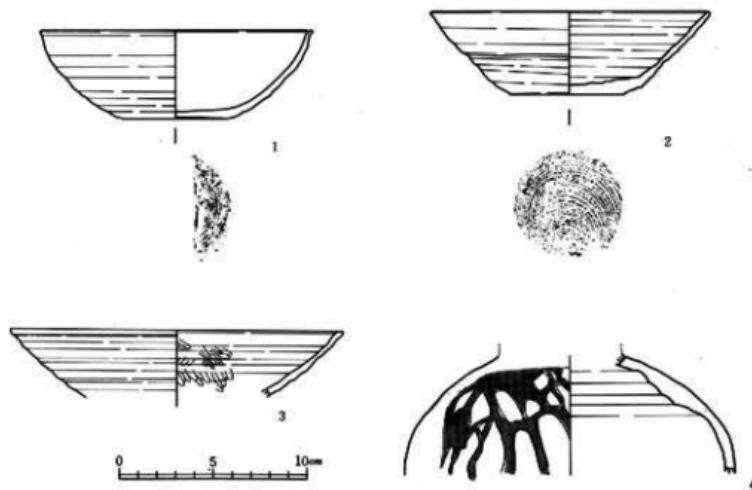
遺物は土師器、須恵器、土製品、鉄器、鐵滓、羽口、炭化物等で、石鎌も1点だけ出土している。以下、実測できた遺物について図示しながら記述する。

a 土 器

須恵器

壺3点、長頸壺1点、甕3点。

壺 体部をロクロ回転で成形し、底部をロクロ回転の糸切りで切り離したもの3点が出土している。底部は切り離し後の調整がない。還元焰による焼成でやや軟質である。岡田茂弘・桑原滋郎両氏の分類による第9類に相当する（註1）。3点とも器形に多少の相違がある。



第11図 須恵器・壺 長頸壺

I (第11図1 図版5-1)

体部が内湾しながら立上り、口径が底径の約2倍となるもの。口径(推)14.6cm、底径6.4cm、器高(推)4.7cm。溝出土。

II (第11図2 図版5-2)

体部が軽く内湾して立上ったあと、いったんくびれ外傾する。口径が底径の2.5倍の数値を示す。口径15.0cm、底径6.0cm、器高4.45cm。黄褐色土層(第4層)出土。

III (第11図3)

体部がゆるく内湾しながら立上る。口径と底径の比がIIに近い。口径18.0cm。褐色土層出土。

長頸壺 (第11図4 図版6-1)

3)

肩がまるい。内外面ねずみ色を呈し、焼成良好、外面の半分に暗いオリーブ色の自然釉がある。褐色土層出土。

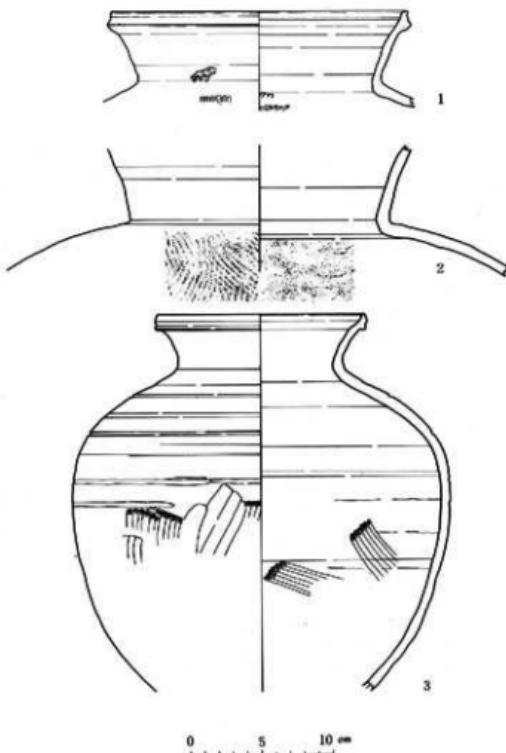
壺

I (第12図1 図版6-2)

色調ねずみ色。焼成よく一部に自然釉がかかる。口頸部は外傾し口縁端部が稜をなす。体部上端の外面に器面再調整のタタキ痕がみられる。内面にヘラミガキの痕跡がある。口径(推)26.0cm。P26出土。

II (第12図3 図版5-3)

色調黒く艶があり、肩の外面と口縁部内面に白灰をかぶっている。最大幅が肩部にあり、口頸部が外反し、口縁がつまみ出されて稜をなす。形状はIに似る。体部は外面とも上半にクロクロ整形痕がみられ、下半には



第12図 須恵器・壺

ヘラなどによるナデまたはケズリがみられる。
最大径26.6cm、口径15.0cm。褐色土層。

III (第12図2 図版6-1)

大壺。黒色を呈し艶があり焼成がよい。肩部の外面と口頸部内面に白灰をかぶっている。
肩部外面に単節の繩目

6条を一単位とするタタキ痕がみられる。内面にもそれとほぼ同じ単位とみられる軽い繩目のタタキ痕がある。口頸部が外反している。褐色土層出土。

土師器

壺 丸底の壺(I類)と平底の壺(II類)とが出土している。平底壺はさらに底部の調整技法と器形によって細分することができる。

I類:(第13図1~3 図版9-7)

3点出土しているが、器形の完存するものはない。しかし図示した壺は、いずれも丸底壺に該当する。外面は体部上半がヨコナデ、体部下半から底部にかけて斜め方向にヘラズリされている。内面は横または斜め方向にヘラミガキされ、第13図2、3は内面が黒色処理されている。体部と底部を区画する段や沈線がないと推定されるが、第13図3(図版9-7)は口縁部に一条の沈線がめぐっている。

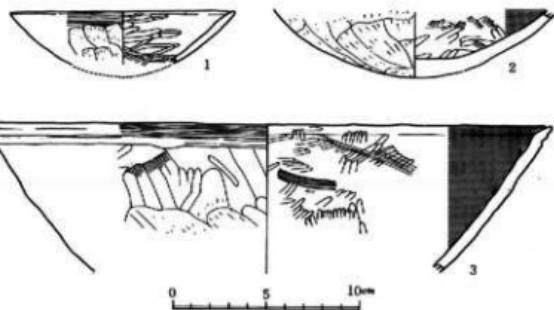
3点とも、器形的に氏家和典氏のいう国分寺下層式(註2)に相当し、桑原滋郎氏が栗井式以後の土師器として分類した壺形土器のD(註3)に相当する。第13図1は褐色土層(第3層)、2は床面(第4層)、3は口径(推)32.0cmで、貼り床層出土である。

II類:

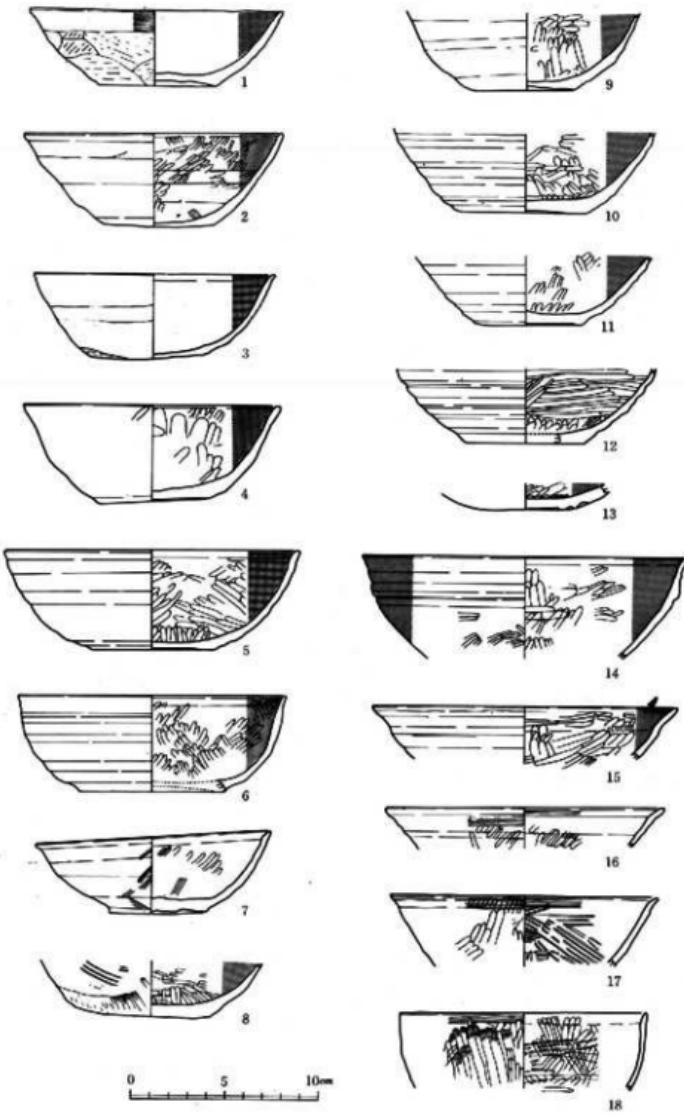
平底の壺をII類とする。図示したもののうち、器形の図上復元できた1~8の壺について更にa~eに細分できる。(第14図1~18 図版7-1~5、図版8-1、2)

II-a (第14図1 図版7-1)

成形技法は不明だが、器面調整にロクロを使わない。口縁部がヨコナデ、体部がロクロ不使用のヘラケズリ調整で、内面の調整技法は不明だが黒色処理を施す。また、底部は全面手持ちによるヘラケズリの調整がみられる。粘土からの切り離し技法は不明である。



第13図 土師器・壺(1)



第14図 土器・壺(2)

II - b (第14図3 図版7-3)

粘土ひもを巻き上げて成形の後、体部外面をロクロ調整する。底部はロクロ回転糸切りで切り離した後、底面全面と体部下端を手持ちヘラケズリする。体部内面にミガキの痕跡があり、黒色処理されている。

II - c (第14図2, 4 図版7-2, 4)

粘土ひもを巻き上げて成形した後、体部外面をロクロ調整している。底部はロクロ回転糸切りで切り離した後、周縁を手持ちでヘラケズリしている。内面にはヘラミガキの痕跡があり、黒色処理が施されている。II - b と類似するが、底部のヘラケズリが周縁だけにとどまる。

II - d (第14図5, 6 図版7-5)

成形技法は不明だが体部外面にロクロ整形がみられる。底部の切り離しはロクロ回転糸切りで、再調整がない。内面は細かくヘラミガキが施され、黒色処理されている。器形のうえから更に2分か可能である。

II - e (第14図7 図版8-1)

体部にロクロ整形痕がみられ、底部の切り離しはロクロ回転糸切り。再調整がない。内面にヘラミガキらしい痕があるが、摩耗のためはっしりしない。黒色処理されていない。

以上II - a ~ e の坏の実測値と出土層位を、個体別に表示すると第4表のとおりとなる。

第4表 土師器平底坏実測値

II - a	14-1	14-2	14-3	14-4	14-5	14-6	14-7	14-8	14-9	14-10	14-11	14-12	14-13	14-14	14-15	14-16	14-17	14-18	14-19	14-20	14-21	14-22	14-23	14-24	14-25	14-26	14-27	14-28	14-29	14-30	14-31	14-32	14-33	14-34	14-35	14-36	14-37	14-38	14-39	14-40	14-41	14-42	14-43	14-44	14-45	14-46	14-47	14-48	14-49	14-50	14-51	14-52	14-53	14-54	14-55	14-56	14-57	14-58	14-59	14-60	14-61	14-62	14-63	14-64	14-65	14-66	14-67	14-68	14-69	14-70	14-71	14-72	14-73	14-74	14-75	14-76	14-77	14-78	14-79	14-80	14-81	14-82	14-83	14-84	14-85	14-86	14-87	14-88	14-89	14-90	14-91	14-92	14-93	14-94	14-95	14-96	14-97	14-98	14-99	14-100	14-101	14-102	14-103	14-104	14-105	14-106	14-107	14-108	14-109	14-110	14-111	14-112	14-113	14-114	14-115	14-116	14-117	14-118	14-119	14-120	14-121	14-122	14-123	14-124	14-125	14-126	14-127	14-128	14-129	14-130	14-131	14-132	14-133	14-134	14-135	14-136	14-137	14-138	14-139	14-140	14-141	14-142	14-143	14-144	14-145	14-146	14-147	14-148	14-149	14-150	14-151	14-152	14-153	14-154	14-155	14-156	14-157	14-158	14-159	14-160	14-161	14-162	14-163	14-164	14-165	14-166	14-167	14-168	14-169	14-170	14-171	14-172	14-173	14-174	14-175	14-176	14-177	14-178	14-179	14-180	14-181	14-182	14-183	14-184	14-185	14-186	14-187	14-188	14-189	14-190	14-191	14-192	14-193	14-194	14-195	14-196	14-197	14-198	14-199	14-200	14-201	14-202	14-203	14-204	14-205	14-206	14-207	14-208	14-209	14-210	14-211	14-212	14-213	14-214	14-215	14-216	14-217	14-218	14-219	14-220	14-221	14-222	14-223	14-224	14-225	14-226	14-227	14-228	14-229	14-230	14-231	14-232	14-233	14-234	14-235	14-236	14-237	14-238	14-239	14-240	14-241	14-242	14-243	14-244	14-245	14-246	14-247	14-248	14-249	14-250	14-251	14-252	14-253	14-254	14-255	14-256	14-257	14-258	14-259	14-260	14-261	14-262	14-263	14-264	14-265	14-266	14-267	14-268	14-269	14-270	14-271	14-272	14-273	14-274	14-275	14-276	14-277	14-278	14-279	14-280	14-281	14-282	14-283	14-284	14-285	14-286	14-287	14-288	14-289	14-290	14-291	14-292	14-293	14-294	14-295	14-296	14-297	14-298	14-299	14-300	14-301	14-302	14-303	14-304	14-305	14-306	14-307	14-308	14-309	14-310	14-311	14-312	14-313	14-314	14-315	14-316	14-317	14-318	14-319	14-320	14-321	14-322	14-323	14-324	14-325	14-326	14-327	14-328	14-329	14-330	14-331	14-332	14-333	14-334	14-335	14-336	14-337	14-338	14-339	14-340	14-341	14-342	14-343	14-344	14-345	14-346	14-347	14-348	14-349	14-350	14-351	14-352	14-353	14-354	14-355	14-356	14-357	14-358	14-359	14-360	14-361	14-362	14-363	14-364	14-365	14-366	14-367	14-368	14-369	14-370	14-371	14-372	14-373	14-374	14-375	14-376	14-377	14-378	14-379	14-380	14-381	14-382	14-383	14-384	14-385	14-386	14-387	14-388	14-389	14-390	14-391	14-392	14-393	14-394	14-395	14-396	14-397	14-398	14-399	14-400	14-401	14-402	14-403	14-404	14-405	14-406	14-407	14-408	14-409	14-410	14-411	14-412	14-413	14-414	14-415	14-416	14-417	14-418	14-419	14-420	14-421	14-422	14-423	14-424	14-425	14-426	14-427	14-428	14-429	14-430	14-431	14-432	14-433	14-434	14-435	14-436	14-437	14-438	14-439	14-440	14-441	14-442	14-443	14-444	14-445	14-446	14-447	14-448	14-449	14-450	14-451	14-452	14-453	14-454	14-455	14-456	14-457	14-458	14-459	14-460	14-461	14-462	14-463	14-464	14-465	14-466	14-467	14-468	14-469	14-470	14-471	14-472	14-473	14-474	14-475	14-476	14-477	14-478	14-479	14-480	14-481	14-482	14-483	14-484	14-485	14-486	14-487	14-488	14-489	14-490	14-491	14-492	14-493	14-494	14-495	14-496	14-497	14-498	14-499	14-500	14-501	14-502	14-503	14-504	14-505	14-506	14-507	14-508	14-509	14-510	14-511	14-512	14-513	14-514	14-515	14-516	14-517	14-518	14-519	14-520	14-521	14-522	14-523	14-524	14-525	14-526	14-527	14-528	14-529	14-530	14-531	14-532	14-533	14-534	14-535	14-536	14-537	14-538	14-539	14-540	14-541	14-542	14-543	14-544	14-545	14-546	14-547	14-548	14-549	14-550	14-551	14-552	14-553	14-554	14-555	14-556	14-557	14-558	14-559	14-560	14-561	14-562	14-563	14-564	14-565	14-566	14-567	14-568	14-569	14-570	14-571	14-572	14-573	14-574	14-575	14-576	14-577	14-578	14-579	14-580	14-581	14-582	14-583	14-584	14-585	14-586	14-587	14-588	14-589	14-590	14-591	14-592	14-593	14-594	14-595	14-596	14-597	14-598	14-599	14-600	14-601	14-602	14-603	14-604	14-605	14-606	14-607	14-608	14-609	14-610	14-611	14-612	14-613	14-614	14-615	14-616	14-617	14-618	14-619	14-620	14-621	14-622	14-623	14-624	14-625	14-626	14-627	14-628	14-629	14-630	14-631	14-632	14-633	14-634	14-635	14-636	14-637	14-638	14-639	14-640	14-641	14-642	14-643	14-644	14-645	14-646	14-647	14-648	14-649	14-650	14-651	14-652	14-653	14-654	14-655	14-656	14-657	14-658	14-659	14-660	14-661	14-662	14-663	14-664	14-665	14-666	14-667	14-668	14-669	14-670	14-671	14-672	14-673	14-674	14-675	14-676	14-677	14-678	14-679	14-680	14-681	14-682	14-683	14-684	14-685	14-686	14-687	14-688	14-689	14-690	14-691	14-692	14-693	14-694	14-695	14-696	14-697	14-698	14-699	14-700	14-701	14-702	14-703	14-704	14-705	14-706	14-707	14-708	14-709	14-710	14-711	14-712	14-713	14-714	14-715	14-716	14-717	14-718	14-719	14-720	14-721	14-722	14-723	14-724	14-725	14-726	14-727	14-728	14-729	14-730	14-731	14-732	14-733	14-734	14-735	14-736	14-737	14-738	14-739	14-740	14-741	14-742	14-743	14-744	14-745	14-746	14-747	14-748	14-749	14-750	14-751	14-752	14-753	14-754	14-755	14-756	14-757	14-758	14-759	14-760	14-761	14-762	14-763	14-764	14-765	14-766	14-767	14-768	14-769	14-770	14-771	14-772	14-773	14-774	14-775	14-776	14-777	14-778	14-779	14-780	14-781	14-782	14-783	14-784	14-785	14-786	14-787	14-788	14-789	14-790	14-791	14-792	14-793	14-794	14-795	14-796	14-797	14-798	14-799	14-800	14-801	14-802	14-803	14-804	14-805	14-806	14-807	14-808	14-809	14-810	14-811	14-812	14-813	14-814	14-815	14-816	14-817	14-818	14-819	14-820	14-821	14-822	14-823	14-824	14-825	14-826	14-827	14-828	14-829	14-830	14-831	14-832	14-833	14-834	14-835	14-836	14-837	14-838	14-839	14-840	14-841	14-842	14-843	14-844	14-845	14-846	14-847	14-848	14-849	14-850	14-851	14-852	14-853	14-854	14-855	14-856	14-857	14-858	14-859	14-860	14-861	14-862	14-863	14-864	14-865	14-866	14-867	14-868	14-869	14-870	14-871	14-872	14-873	14-874	14-875	14-876	14-877	14-878	14-879	14-880	14-881	14-882	14-883	14-884	14-885	14-886	14-887	14-888	14-889	14-890	14-891	14-892	14-893	14-894	14-895	14-896	14-897	14-898	14-899	14-900	14-901	14-902	14-903	14-904	14-905	14-906	14-907	14-908	14-909	14-910	14-911	14-912	14-913	14-914	14-915	14-916	14-917	14-918	14-919	14-920	14-921	14-922	14-923	14-924	14-925	14-926	14-927	14-928	14-929	14-930	14-931	14-932	14-933	14-934	14-935	14-936	14-937	14-938	14-939	14-940	14-941	14-942	14-943	14-944	14-945	14-946	14-947	14-948	14-949	14-950	14-951	14-952	14-953	14-954	14-955	14-956	14-957	14-958	14-959	14-960	14-961	14-962	14-963	14-964	14-965	14-966	14-967	14-968	14-969	14-970	14-971	14-972	14-973	14-974	14-975	14-976	14-977	14-978	14-979	14-980	14-981	14-982	14-983	14-984	14-985	14-986	14-987	14-988	14-989	14-990	14-991	14-992	14-993	14-994	14-995	14-996	14-997	14-998	14-999	14-1000	14-1001	14-1002	14-1003	14-1004	14-1005	14-1006	14-1007	14-1008	14-1009	14-1010	14-1011	14-1012	14-1013	14-1014	14-1015	14-1016	14-1017	14-1018	14-1019	14-1020	14-1021	14-1022	14-1023	14-1024	14-1025	14-1026	14-1027	14-1028	14-1029	14-1030	14-1031	14-1032	14-1033	14-1034	14-1035	14-1036	14-1037	14-1038	14-1039	14-1040	14-1041	14-1042	14-1043	14-1044	14-1045	14-1046	14-1047	14-1048	14-1049	14-1050	14-1051	14-1052	14-1053	14-1054	14-1055	14-105

第15図1は、丸底ぎみの坏部に踏んぱりの強い高台をつけたもの。器面が荒れて技法がよくわからないが、底部の切り離しは回転糸切りであろう。内面にヘラミガキの痕跡があり、黒色処理されている。白っぽい茶色。高台端部径8.6cm。床面の粘土塊の匂いの中から出土した（第10図および図版4参照）

2（図版8-2）は小形で、盤状の坏部に踏んぱりの強い高台をつけたもの。成形技法は不明だが粘土ひも巻きあげのようである。内面にヘラミガキの痕跡がある。黒色処理をしていない。口径（推）13.0cm、高台端部径7.6cm、器高3.4cm、坏部高1.8cm。床面出土。

3、4は高台が高く、端部の直径が小さい。3は端部が外反する。内外黒色処理。褐色土層出土。4は溝出土。図示しないものに4の器形のものが多い。

耳皿（第16図1、2 図版10-2、1）

3点出土したが図上復原したのは2点である。図の1、2とも内外面を黒色処理している。

1は高台部分を造り出し、内面をヘラケズリしている。体部の外面はヘラナデ整形し、内面は周縁に沿ってヨコナデし、また一定方向にヘラミガキしている。再調整はかなり難である。褐色土層出土。

2は底部をロクロ回転糸切りで切り離し、調整をしない。外面はヨコナデ、内面はヘラで円弧状にナデている。

柱穴ピット（P5）から出土。

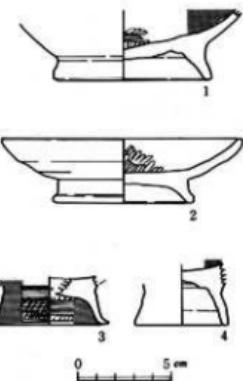
甕（第17図1～5 第18図1～6 第19図 図版9-1～6）

器形によって甕と鉢とを区分したが、甕はさらにI類～IV類に分類できる。

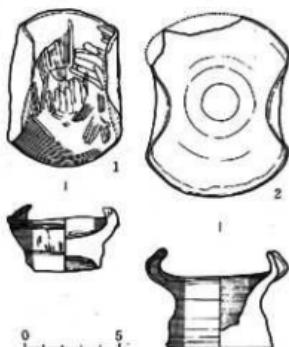
I類：（第17図1～5） 図版9-1～4

口径が胴径より大きく、胴部が長胴となるもの。口縁部が大きく外反または外傾する。口縁部は内外面ともヨコナデする。胴部の外面は1、2のように縦方向にヘラナデするものと、3、6のように縦方向にヘラケズリするものとがある。内面はヘラ状工具のアテ痕がみられるが、3のように刷毛目状のものもある。

口縁部の形状と体部外面の調整技法を組み合わせて細分するとI-a（1、2）、I-b（



第15図 土器・高台付坏



第16図 土器・耳皿

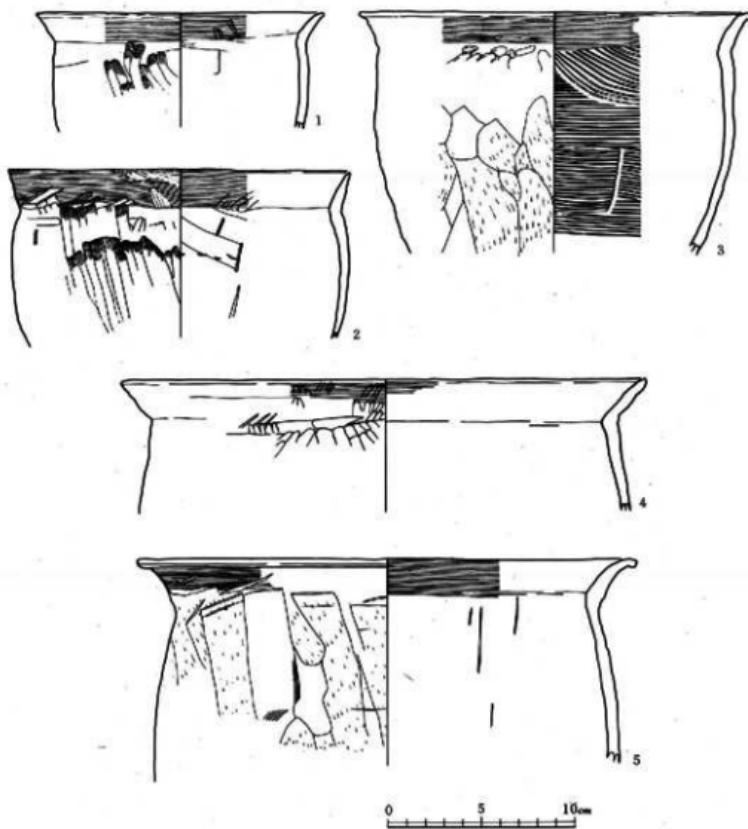
3、6)、I-e(4)となりそうである。

II類：(第18図1～3 図版9～5)

口径よりも胴径が大きいもの。口縁部がきつく外反する。口縁部は内外面ともヨコナデ、胴部は外面に縱方向のヘラミガキの痕跡がある。内面はクシ状の工具による再調整がみられる。

III類：(第18図4、5)

口径よりも胴径が大きい点ではII類と同じだが、口縁部がきつく外反せず、口縁端部も丸くないもの。内面にヘラミガキの痕跡があり、黒色処理が施されている。



第17図 土篩器・甌(1)

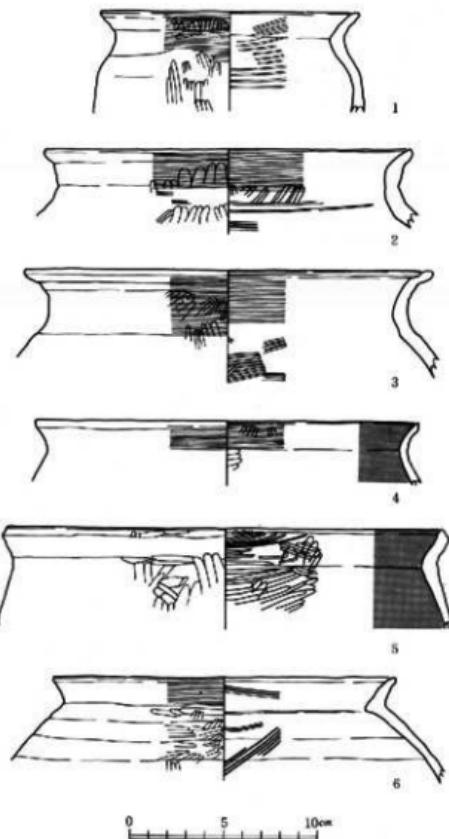
IV類：(第18図6 図版9-4)

肩が強く張り出し、口縁部がきつく外傾するもの。1点だけの出土である。6は外面が口縁部にヨコナデ、体部に若干のヘラミガキの痕跡がある。内面はクシ目状工具の痕がある。粘土ひも巻上げである。

鉢 (第20図1～3 図版9-3)

第5表 土師器出土層位
(平底壺を除く)

類	図	図版	出土層位
壺I類	13-1		褐色土層
	13-2		黄褐色土層
	13-3	9-7	貼り床層
高台付壺	15-1		床面粘土地閉い
	15-2	8-2	床面
	15-3		褐色土層
	15-4		溝
耳皿	16-1	10-2	褐色土層
	16-2	10-1	床面ピット5
甕I類	17-1		床面ピット30
	17-2		貼り床層
	17-3	9-1	床面
	17-4		褐色土層
	17-5		床面
甕II類	18-1		貼り床層
	18-2	9-5	褐色土層
	18-3	9-2	貼り床層
甕III類	18-4		貼り床層
	18-5		褐色土層
甕IV類	18-6	9-4	貼り床層
鉢	20-1		貼り床層
	20-2		褐色土層
甕	20-3	9-3	床面
	19	8-6	貼り床層



第18図 土師器・甕(2)

口径が胴径よりも大きく、胴部下半が内湾して器高が口径には等しいものを鉢とした。1~3は、口縁がつよく外反し、内外面ともヨコナデしている。胴部の内外面はヘラミガキしたもの(2)と、クシ状工具で整形したもの(3)とがある。

他に甕の底部破片が貼り床層より1点出土している(第19図 図版9-6)。底部は不定方向へラケズリ、胴部は外面がケズリ、内面に板状工具による整形がみられる。

線刻文字のある土師器 (第21図1 図版8-3)

土師器の平底坏の体部外面に「中」と線刻したものである。坏は粘土ひも巻上げの成形で、体部をロクロ整形し、内面を黒色処理している。底部はおそらく回転糸切りの切り離しで、坏の分類のII-dに相当するだろう。「中」の線刻は焼成後である。床面P2より出土。

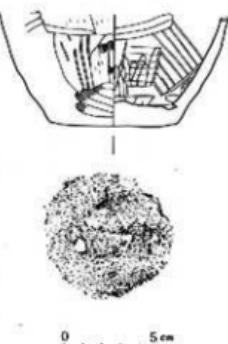
ヘラ書きのある土師器

平底坏の底面に、ロクロ回転糸切りで切り離した後「X」とヘラ書きしている。ヘラ書きは焼成前である。須恵器坏の「カマ印」と同様の意味をもつものであろう。坏の分類II-dに相当すると思われる。(第21図2 図版8-4) (三宅宗謙)

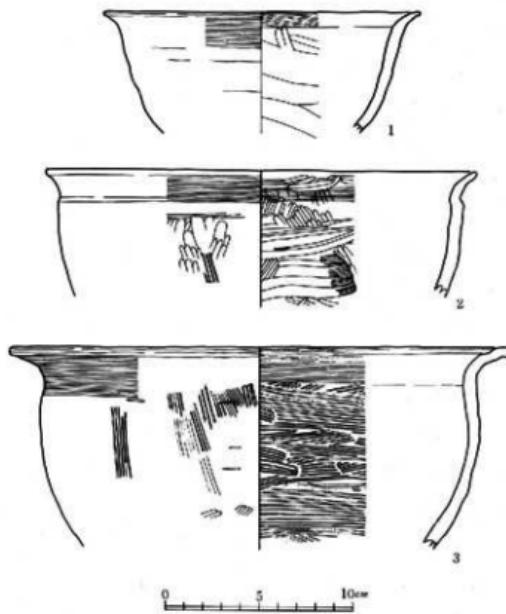
b 土製品その他

手捏ね土器 (第22図1 図版10-4)

小形の土師質の土製品で、上部はもう少し続いていたかもしれない。一応、器状になっているが、体部の半分が偏平である。



第19図 土師器・甕底部



第20図 土師器・鉢

土鉢 (第22図2 図版10-3)

土師質で、ねずみ色を呈する。鉢部のみで、下端に剥落の痕跡がある。上半と下半を別に製作して接着したことが知られる。鉢部中央にひも通しの貫通孔がある。

石 錫 (図版10-5)

半透明の玉髓質の無柄石錫で、二等辺三角形の底辺にわずかに挟り込みがみられる。褐色土層出土。付近に縄文中期大木7b~8a式土器の出土地があるのでそこからの流入であろう。

(佐藤信行)

c 鉄 器

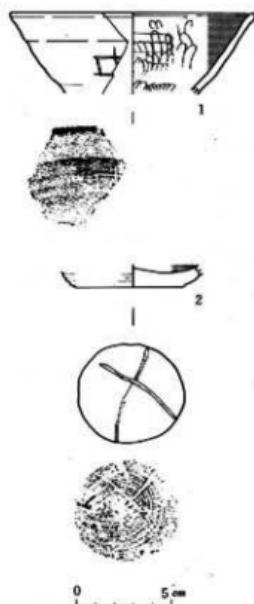
刀子 (第23図1 図版11-1)

刃先から5.2cmだけ残して折損している。平棟造りでやや反りがあるかに見えるが、これだけからは断言できない。銹化が著しく鏽こぶが多く、全体的に曲がありがある。折損部の断面に鎌接面が認められ、この刀子は折り返し鎌えで製作されたものと推定される。

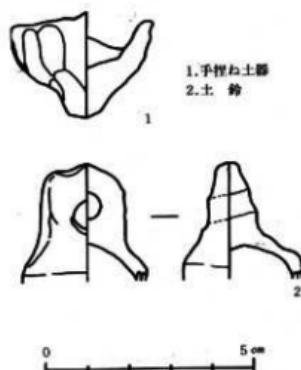
現長5.2cm、刃幅1.8cm、棟幅0.4cm。

鉄錫 (第23図2~5 図版11-2, 3)

完成品3点と茎のみのもの1点だけ出土している。いずれも長頸錫で、寸法は第6表のとおりである。平根脇挾式の鉄錫 (第23図2 図版11-2) はほんの一部が欠損しているだけでよく保存されている。鏽こぶなどが多く表面が一様にきれいに銹化されており、関節部が明確に認められ、刃先に行くにつれて薄く、よく鎌えられた製品と思われる。第23図3 (図版11-3の1) の鉄錫は全体的に銹化がかなりすんでおり、鏽こぶ多く関節部がよく判明しないばかりか、どの形式の錫か断言できないほどである。断面の計測から平根三角形式と推定される。細根三角形式の鉄錫 (第23図4 図版11-3の2) もまた鏽こぶが多いが、折れた箇所部分の断面はほぼ方形であった。鏽こぶのように刃先



第21図 線刻ある土師器



第22図 1. 小型手捏ね土器と土鉢

の方に、直角に長さ

1.0cmほどのもう1

本の錆の範囲が付着していた。

鉄滓（図版12、13）

焼土上の中心に第

7表に示すような大

きさのまちまちな鉄

滓が出土した。鉄滓

はいずれも表面が焼

けただれたように粗

鬆な小孔が見られ、

ところどころに、熱

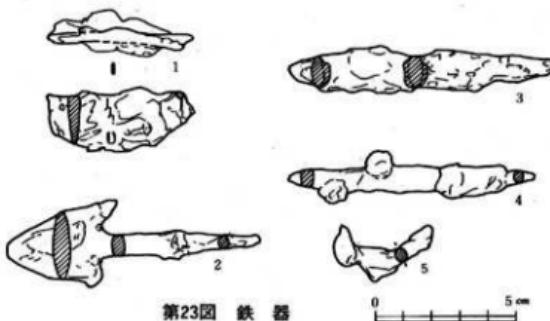
で分解された粘土状のものや木炭滓が入り込んでいる。これは比較的なめらかなガラス状の感じのする製練滓とは異なる様相を呈していて、断言できないが鍛冶滓と推定される。

なお鉄器、鉄滓に関する科学的検討はV考察のところで述べる。

吹子の羽口（図版11-4、5）

内径2.0cm、外径4.5cmで、一端が鉄滓で覆われているもの1点と、内径1.6cm 外径4.2cmで鉄滓の付着していないもの1点が、貼り床層から出土した。いずれも縦に割れた破片で、白粘土でかたくつくられており、仕上げもていねいに行なわれている。1本の羽口かどうかは判明しない。近世の小鍛治用吹子に類似して小さく、付着した鉄滓は製練滓特有のなめらかな船状の部分がなく、鍛造用であろうと思われる。

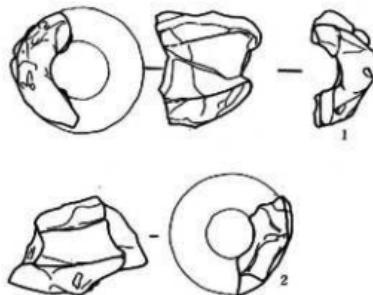
(鶴田 勝彦)



第23図 鉄 器

第6表 鉄錆寸法表 (cm)

鉄 錆	全 長	基 部
1 (第23図2)	9.1	2.6
2 (第23図3)	9.4	不明
3 (第23図4)	8.7	1.2



第24図 羽 口

第7表 鉄滓の大きさ

鉄 滓	A	B	C	D
最大長さ cm	9.8	9.4	11.5	5.4
重 さ g	180	162	110	105
E	F	G	H	I
4.5	6.5	5.5	3.6	3.0
7.5	9.5	9.8	2.8	8
				1.2

註

- 1　岡田茂弘・桑原滋郎「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」宮城県多賀城跡調査研究
所『研究紀等』I 1974年
- 2　氏家和典「陸奥国分寺跡出土の丸底壺をめぐって」『相倉亮吉教授還暦記念論文集』1967
年
- 3　桑原滋郎「東北地方北部および北海道の所謂第Ⅰ形式の土師器について」『考古学雑誌』
第61巻第4号 1976年

V 考 察

1 遺構の性格

1 発掘によって、がんげつ遺跡では、ほぼ方形の周溝で区画された竪穴遺構を検出した。

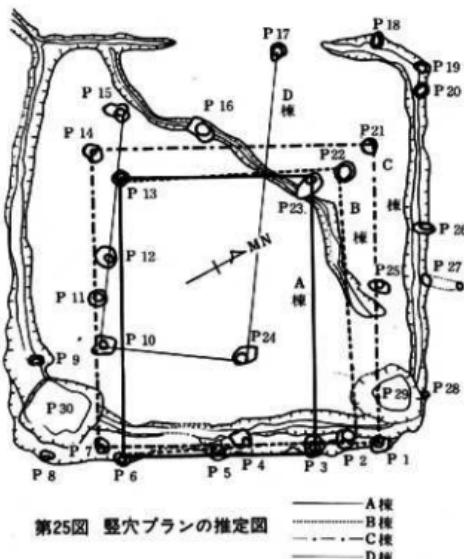
この遺構は粘土を突き固めて整地した「貼り床」をもち、床面や周溝に多数のピットをもつたものである。そしてピットには柱穴とみられるものが多いところから、この遺構は建物遺構であったことが考えられる。

ところで、この遺構の周溝に改修の痕跡のあったことを先に記したが、ピットそのものの配列を検討してみると、この周溝の範囲内で、少なくとも3棟分の建物跡が重複しており、建物も建て替えていたことがわかる。いま20分の1平面実測図をもとにして、床面のP13の柱穴部分に直角定規の角をあてて他のピットと結ぶと、P13-P23-P3-P6をコーナーとする長方形の建物プランができる。四つのコーナーはほぼ直角である。これをA棟と名づけることにする。

同様にして、P13-P22-P2-P6をコーナーとするB棟が得られ、P4-P21-P1-P7をコーナーとするC棟が得られる。B棟のコーナーは直角でないが、C棟はほぼ直角を呈する。

建物のプランはA棟が長方形、C棟は正方形で、B棟がそれらの中間に位置し、建坪面積はA棟が最も小さくC棟が最も大きい（第25図参照）。

3棟の建物跡は、それぞれ柱間に相違がみられる。建物が全て南面するものと考えると、A棟は桁行、梁行とも1間である。B棟も桁行、梁行とも1間のようだが、東側の周溝上を走る梁線にP5がかかり、これを中間の柱とすればP2-P6間はほぼ等間の梁行2間となる。C棟のばあいは桁行2間、梁行1間となるが、これも東側周溝上の



第25図 竪穴プランの推定図

梁線にP4がかかる、これを中間の柱とすればP1-P7間はほぼ等間の梁行2間となる。B棟もC棟も西側の柱間の間隔が大きすぎ、東側と対応する中間の柱のないことに疑問があるが、発掘中には検出できなかったものである。

2 3棟の柱間の計測値は、20分の1実測図をもとに第8表のようになつた。計測にあたってはビット中の柱穴部分を選び、建物のコーナーができるだけ直角に近くなる点で計っている。これらの建物は、建設当時どのような尺度を用いたものであろうか。

がんげつ遺跡の建物遺構は、後でも述べるとおり8世紀後半から10世紀までの遺物を出土し、建物そのものは9~10世紀中に建て替えられたと考えられる。この時期は唐尺が全国的に普及しているから、ここの建物も一応唐尺を用いていたと考えることができる。ただ唐尺そのものも、構造や時期によって多少の相違があることが指摘されている。ここでは進藤秋輝氏の教示によって1尺当り29.0cmから30.0cmまでの単位を用いて0.1cm毎に割り出してみた。

それによると、がんげつ遺跡の建物跡の柱間は、どの尺度を用いても完数で割りきれるもの少ない。ただ、完尺ではなく、1尺や5寸の近似値を示す単位尺を強いて選べばA、B両棟は1尺が29.8cm、C棟は30.0cmということになる。これらの建物跡は官衙遺跡とは言いがたいから、尺度の適用も実際の建築もそう厳密でなかつたのかもしれないが、それにしても、B棟のようにP13-P22間の最大誤差が大きいことは、使用尺についての検討を今後に課しているといえるだろう。

3 これらの建物の時期的な先後関係は、遺構からも遺物からも具体的に把握することができない。遺構全体の年代幅は先にふれたとおりだが、建物遺構そのもの、特に柱穴ビットの相互関係や貼り床の修復等について、3棟間の時期関係を直接示し合う証拠が得られない。ある。

遺構のなかで、先に、東コーナーにあるビット(P29)が周溝と重複し、南コーナー付近の周溝と床面焼土との間に同様の関係のあることを指摘したが、これらもまた、建物それ自体の相互関係を直接立証するものとはならない。

ただ、遺構全体のプランを見て注意されることは、周溝と各建物の間の間隔である。A棟の南北に走る桁線と、周溝の南北の部分とは平行しているが、また両者の間隔がほぼ等しい。それに対してB棟、C棟は北側の桁線が周溝側に寄りすぎている。建物と周溝との有機的関係を図式的に考えれば、周溝はA棟が建てられたときに作られたと考えることができる。とすればB棟、C棟は、A棟に伴なつた周溝をそのまま利用したか、それともA棟=周溝以前に作られたことになる。ただB棟もC棟も周溝の西側部分に柱穴ビットを掘っているから、A棟に伴なう周溝を、後で再利用したと考えられる。とすると3棟のうちでA棟が最も古い時期のものとなる。また、B棟とC棟の時期的相互関係であるが、B棟の方がC棟よりも古いことが考えられる。B棟がA棟と同様に長方形のプランを有し、A棟の柱穴ビットP6、P3を利用してい

第8表 各建物の柱間寸法

○小数点以下第3位で四捨五入

辺	SW - NE	NW - SE	NE - SW	SE - NW
A 棟	P 13 - P 23	P 23 - P 3	P 3 - P 6	P 6 - P 13
	3.34m	4.80m	3.40m	5.06m
B 棟	P 13 - P 22	P 22 - P 2	P 2 - P 6	P 6 - P 13
	3.96m	4.74m	4.06m	5.06m
C 棟	P 14 - P 21	P 21 - P 1	P 1 - P 7	P 7 - P 14
	5.10m	4.94m	4.94m	5.10m
D 棟		P 17 - P 24	P 24 - P 10	P 10 - P 15
		5.50m	2.62m	4.24m

ること、A棟と同様に1尺29.8cmの基準尺を用いているらしいことなどが、その根拠である。B棟はおそらく、A棟に近い時期に建て替えたものであり、C棟はやや時期を隔てて建てられたものであろう。

従ってA、B、Cの3棟の時期的相互関係は、古い方からA→B→Cとなり、時期が下るにつれて建物は拡張され、C棟に至って中間の柱を必要とする規模になったと考えたい。

4 これらの建物の性格は、一貫して共通したものと考えられ、一応、竪穴住居跡とすることができる。床面を囲く叩きしめて「貼り床」とし、そこで火を用いた痕跡のみられることは、貼り床面そのものが第1義的な生活面であったことを推測させる。これを例えば官衙の遺構とすることはできないだろう。ただ、かまどを有した痕跡が乏しいこと、床面に鉄滓や羽口等の鉄製鍊關係の遺物を出土していることなどから、この遺構を単純に居住の場としての住居跡とだけ解釈することはできないだろう。建物の総面積や柱間寸法の大きいことなども考慮に入れると、屋内生産の場としての性格を兼備した住居跡とするのが適当であろう。

ただ、発掘された遺構について、今後とも検討を加えなければならない問題もある。たとえば、仮にD棟とした柱穴ビット列をはじめ、解釈未了のビット群の問題がある。A、B、Cの3棟の柱穴ビットにしても、梁行の片側だけ周溝にかかること自体問題となるだろう。また遺構の南コーナー付近に見られた粘土塊による特殊遺構も、屋内または屋外における生活遺構と考えられるが、それ以上のことは、未解決の問題である。

今回の発掘調査では諸般の事情で、如上の知見を得たにとどまったが、9世紀ないし10世紀にいたる時期の竪穴住居の一形態を検出したことは、今後の研究に資する事が大きいと思われる。

(三宅宗謙)

2 出土土器と遺構の年代

1 がんげつ遺跡の土器は、IV遺物の項で述べたように、須恵器と土師器が出土している。須恵器には壺、甕、長頸壺があり、土師器には壺、高台付壺、耳皿、甕、鉢などがみられる。いまこれらの土器のなかから、編年研究の比較的進んでいる壺を取り上げて、この遺跡出土の土器の年代と遺構そのものの年代を推定することにする。

まず、須恵器の壺が、岡田、桑原両氏の分類の第9類に相当することはIVで述べた。両氏は9類をa、bに細分し、aの実年代を8世紀後半から9世紀前半までの時期、bを9世紀前半から10世紀初頭までとしているが（註1）、がんげつ遺跡出土の壺も、土師器との共伴関係をみれば、ほぼその年代幅のなかで考えることができる。

土師器の壺については、丸底壺をI類、平底壺をII類と分けたが、I類は氏家和典氏のいう国分寺下層式、桑原氏のいう壺形土器のDに相当するもので、栗門式に後続する土器として実年代を8世紀後半ないし9世紀初頭に置くことができる（註2）。

II類の平底壺については、底部を糸切りまたはヘラ切りで切り離した平底壺を指すもので、ほぼ表杉ノ入式に含められ、この遺跡出土の壺の主体を占める。

ところで、表杉ノ入式の壺について、つとに加藤孝氏の研究（註3）や氏家和典氏の論考（註4）があり、最近では桑原氏ら（註5）や小笠原好彦氏（註6）の論考がある。桑原、小笠原両氏の論考では、いわゆる「あかやき」の須恵系土器を除外した上で、表杉ノ入式の壺にみられる技法的特徴が幾つか指摘されている。ここでもそれにならない、小笠原氏が表杉ノ入貝塚の壺で試みた分類（註7）と対照してみると次のようになる。

がんげつ遺跡出土の土師器の壺第II類は

II-a 底部切り離し技法は不明。底部から体部上半近くまでロクロ不使用のヘラケズリ。

口縁部ヨコナデ。小笠原氏の分類に該当せず。

II-b 底部ロクロ回転糸切りで、ロクロ不使用のヘラケズリ。体部下端にケズリが及ぶ。
小笠原氏のいうB-H1手法で第2類に相当する。

II-c II-bとは同じだが、ロクロ不使用のヘラケズリは底部のみで、体部下端には及ばない。小笠原氏のB-H2手法で、第3類相当。

II-d 底部ロクロ糸切りで、調整なし。体部の調整もない。小笠原B-O手法で第3類。
II-e 上に同じで、B-O、第3類。

以上のなかで、がんげつII-aとした壺は、一見小笠原氏の第2類H1に類似するが、体部のヘラケズリが口縁部まで至らず、口縁部分がヨコナデされていて、やはり区別される。口縁部のヨコナデは国分寺下層式のような丸底壺に類似するので、その系統を受け継いだ技法と考えられる。

えられる。底部切り離し技法が不明であり、資料が1点だけなので検討の余地があるが、ここではいちおう表杉ノ入式の古い技法のものと考えておく。

がんげつII-bは、II-cの底部にみられたロクロ不使用のヘラケズリが、体部下端にまで及んだものである。小笠原氏の分類に該当しないが、B-H2手法の延長と考えれば氏の第2類に相当しよう。

がんげつII-dとII-eは小笠原氏の分類では第3類に一括される。ただdには体部内面に黒色処理があり、eはない。dとeにはまた器高と口径の比にも相違があるので、こうした相違も表杉ノ入式の細分にあたって考慮される余地があるだろう。なおII-eは須恵系土器ではない。

2 次にこれらI類、II類の時期または技法の先後関係が問題となるが、がんげつ遺跡で図上復元できた壺を、層位別、分類別に記すと次のようになる。

第3層（褐色土層） I、II-a、II-c

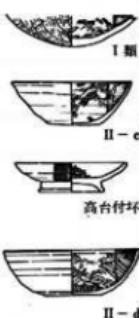
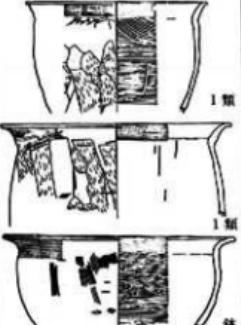
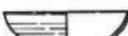
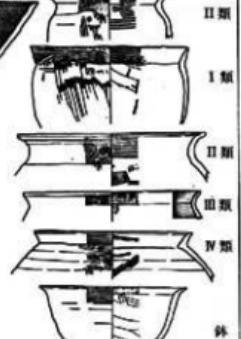
第4層（黄褐色土層） I、II-c、II-d

床面（直上・ビット・溝） II-b、II-e

第5層（貼り床層） I、II-d（図示せず）

一見しただけでは、I類とII類の間の先後関係や、II類のa～e間の先後関係を把握することはむずかしい。ただ、第3層の堆積土は、この竪穴住居が廃絶した後に流入したと考えられ、相当の時間的経過も考慮されるから、この層から出土した壺は、ここでは対象外に置かれる。また、第4層の黄褐色粘土層であるが、これは竪穴住居の立地する地山が風化して2次的に自然堆積したものであり、この竪穴住居が廃絶されて間もない時期のものと思われる。堆積土が床面上にあり層厚も数cm程度なので、この層出土の壺はいちおう考慮の対象となるだろう。

とすれば、各類の壺の先後関係は、層位的に見て〈I、II-d〉→〈II-b、II-e〉→〈I、II-c、II-d〉の形で把握されることになる（第9表参照）。ただし、第5層（貼り床層）のIとII-dとの関係、第4層（黄褐色粘土層）のIとII-c、dとの関係は、層位的に共伴関係にあるとはいっても、使用時期の同時性をそのまま意味するとは言いたいだろう。第5層の壺については、発掘の過程で貼り床の整地が1回だけだったかどうかの確認ができないこともあるが、整地の際に古い壺が混入したこととも考えられるからである。第4層の壺についても、竪穴住居跡がA棟からC棟へと建て替えられているので、それぞれの建物の時期の壺が床面上に遺存したことも考えられる。また床面出土の壺の中でII-eの壺は、周溝に掘られた柱穴ビット（P1）の中に落ち込んでいたもので、P1を利用した竪穴住居（C棟）の廃絶後のものである。

須恵器		土師器			備考
环	环・高台付环	甌	鉢		
黄褐色土層(第4層)		 I類 II-c II-d	 I類 II類		
床面(ヒット)		 II-d II-e	 1類		須恵器の甌が出土している。 土師器の耳皿が出土している。
床面(溝)					
床面(直上)		 II-b			
貼り床層(第5層)		 I類	 II類 I類 III類 IV類 鉢		

第9表 土器の層位別出土状況

したがって II-e の坏は II-b と時期的に平行するとは言いかがたい面もある。

以上のように、II 類の b~e の坏の層位的な出土状況は、小笠原氏が製作技法の分類によつて想定した表杉ノ入式各類の先後関係（註 7）とは必ずしも一致しない。

氏によれば、ロクロ成形・回転糸切り（または回転ヘラ切り）の坏は、量産化が進む過程でケズリ等の器面調整の簡略化傾向がみられるという。これに従えば、がんげつ遺跡出土のII 類の坏は、ケズリ調整のより丁寧な II-a が技法上古く、以下、b、c、d、e の順で先後関係を考えられるわけであるが、II-a は別としても、上に述べた状況でその時期的関係を確認することはできなかった。

ところで、がんげつ遺跡の竪穴住居跡は、土師器の坏によって平安時代の表杉ノ入式の時期のものと考えられるが、更にいえば、II-d の坏の時期以後に貼り床が施され、II-b、c、d の坏の期間使用され、II-e の坏の時期以前に廃絶したことになる。この住居跡が A 棟、B 棟、C 棟の順に建て替わっていることは既に述べたところだが、この建て替えも上記の坏の期間に行なわれたことになる。ただ、建物と坏との関係は具体的にはわからない。竪穴住居跡の実年代については、国分寺下層式以後に始まり須恵系土器以前に終了したことになるので、8世紀後半以降、11世紀初頭以前（註 9）の年代幅が考えられる。さらにここでは、遺構の貼り床出土の表杉ノ入式土器を取り上げ、その年代観についての通説に従って、竪穴住居を 9 世紀初頭の開始と考え、10世紀頃の廃絶と想定したい。時代区分でいえば、平安時代の初期から前期にかけてのものとなる。

なお、土師器の坏だけでなく、甕、鉢、耳皿等の器種についてもふれなければならないが、余裕がなくなった。第 9 表に図示したとおりである。これの検討は別の機会にゆずりたい。

（付記）がんげつ遺跡の P2 の中から出土した、「中」の刻字ある土師器杯について一言すると、こここの土師器の分類で II-d に相当し、小笠原氏のいう表杉ノ入式第 3 類にあたる。P2 は竪穴住居の B 棟の柱穴ピットである。

（三宅宗議）

註

- 岡田茂弘・桑原滋郎「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」宮城県多賀城跡調査研究所『研究紀要』 1974年
- 氏家和典「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって」『山形県の考古と歴史－柏倉亮吉教授還暦記念論集』 1967年
桑原滋郎「東北地方北部および北海道の所謂第 1 形式の土師器について」『考古学雑誌』第 61 卷第 4 号、1976 年
- 加藤孝「塩釜市表杉ノ入貝塚の研究」『宮城学院女子大学研究論文集』 1967 年

氏家和典註 2 論文

- 4 氏家和典「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯 1957年
- 5 工藤雅樹・桑原滋郎「東北地方における古代土器生産の展開」『考古学雑誌』第57巻第3号 1972年

桑原滋郎註 2 論文

- 6 小笠原好彦「東北における平安時代の土師器についての二、三の問題」『東北考古学の諸問題』 1976年
- 7 小笠原好彦註 6 論文
- 8 同上
- 9 国分寺下層式の実年代については、氏家和典註 2 論文および桑原滋郎註 2 論文。
須恵系土器の上限年代については、桑原滋郎「須恵系土器について」『東北考古学の諸問題』 1976年 に従っておく。

3 鉄器・鉄滓について

栗原郡内の出土鉄器の分布

がんげつ遺跡からは、前述のように5点の鉄器と若干の鉄滓が検出された。発掘の前後に、広義のがんげつ遺跡から出土した鉄器に、蕨手刀・鉄鎌・刀子が各1点ある。奈良・平安時代の遺跡から鉄器が発見されるのは極めて一般的な事であるが、奈良時代以前の出土例に比較すると、極端な増加の現象が認められる。このような鉄器類の増加現象が、集落の増加に比例する事は勿論、鉄器の一般集落への普及化が進んだことにも一因があろう。このような普及化はそれまでの特定地域の專業集団からの供給にのみ依存しては、およそ不可能に近く、おそらく「郡」あるいは「郷」等集団内部に、自給を目的とした小規模な鍛冶工房の出現を考慮してよいであろう。それは、專業的な鍛冶集団ではなくて、いわゆる「野鍛冶」あるいは「小鍛冶」と呼ばれるような小規模な室内工業的なものであったかと思われる。

一般遺跡から出土する、鎌・刀子・鎌・鋤・鋤先・防輪等の農・工具類の大部分は、充分彼らの製作でまかなわれたであろう。一方、刀剣・馬具等の特定の人々の需要品の一部は、なお他からの流通又は供給に依存するものもあったであろう。

現在、県内で古代の鍛冶工房の遺構として明確にされた例はないようである(註1)。ただ、奈良・平安時代遺跡から、時たま吹子の羽口や鍛冶滓が出土することによって、間接的に証明できる。

第10表の、栗原郡内の鉄器出土地名表に明らかのように、集落跡から出土する鉄器と墳墓から出土する鉄器とでは、器種に大きな相違が見られる。郡内の集落跡から出土する鉄器には、鎌・斧・刀子・鋤先があり、その大部分は鎌で、刀子・斧・鋤先の順に次いでいる。

鎌類の多出は、当時の政情不安を示すものであろうか。刀子・斧等は当時の生活に不可欠な道具であるが、農業関係の鉄器が少ないので不思議である。農業生産が飛躍的に増大すれば、それに応じて耕作用の鎌・鋤や刈取り用の鎌等の需要も増大したはずである。鋤・鎌等は、小牛田町山前遺跡(註2)の出土例でも明らかのように、古墳時代初めから木製で代用する事が可能ばかりか、一般の湿田ではむしろ木製農具が主流を占めていたのかも知れない。ただ、稲の刈取り用として不可欠の鎌の出土が知られないのは不思議である。先年調査した栗駒町長者原遺跡で古墳中期の堅穴住居跡から出土した鉄器は、その後の検討で鎌であることが判明した。この事から、栗原地方でも5世紀代には遅くとも鎌の出現が知られるので、農業が発達した奈良・平安時代には、かなりの普及を見ていたことはまちがいなかろう。青森県あたりの奈良・平安時代遺跡からも多量の鎌類が出土しているというし、宮城県内の奈良・平安時代の遺跡でも、鎌や延石が一般的に出土しているから、各地域における出土量の多寡は、遺存度の問題に起因

第10表 奈良・平安時代の鉄器出土地（栗原郡）

集落遺跡

1977年3月現在

No	遺跡名	鉄器の種類と員数()内	保管者	時期(件出土による)
1	高清水町大寺	鉄斧(1)	佐藤信行	奈良時代
2	瀬峰町藤沢の場山	鉄斧(1)	二上鎮雄	平安時代
3	瀬峰町人里ガングツ	鉄鎌(4) 羽口(2) 鉄滓(1)	佐々木尚見	平安時代
4	瀬峰町大里中山	鉄刀子(1)	佐藤信行	平安時代
5	志波船町北郷線塚	鎌先	宮城県教委	奈良末～平安初
6	若柳町有賀塚	鉄鎌(1)	"	"
7	金成町佐野	鎌、刀子、砥石	"	"
8	栗駒町長者原	鎌(1) 刀子(3)	栗駒町教委	奈良末
9	高清水町西子取	種別不明	宮城県教委	平安時代

古墳関係(古墳一高塚古墳)(構・横穴古墳)

1	志波船町城内(古?)	薙手刀(3)	志波船町教委
2	瀬峰町大里ガングツ(古)	薙手刀(1)	佐藤司
3	築館町宮野小館山(構)	薙手刀(1)	散逸
4	築館町富野大沢(構)	薙手刀(2)	照明寺
5	栗駒町鳥矢崎(古)	薙手刀(1) 刀子(1) 馬具	栗駒町教委 奈良末
6	一迫町鹿島西館(構)	薙手刀	東北大學? 奈良末
7	" 保呂羽山(構)	刀	散逸
8	" 川口山館(構)	刀(1)	三塚信一

その他

	築館町城生野	羽口(2)	照明寺	奈良末
	" 玉沢新田	羽口(3)	光明寺	平安時代

する場合もあったろう。

墳墓一古墳一から出土する鉄器では、薙手刀が圧倒的に多く、刀類は、精査すれば、どこの古墳群にも含まれているといえそうである。他に、刀子・馬具等の出土が各一例報告されている。

註

1 「多賀城跡第28次調査現地説明会資料」1976によると、明らかに小鎌治工房跡と推定される遺構と、鉄製品関係工房跡と思われる遺構が各1発見され、鉄滓・釘・刀子・堀端が出土しており、現在、調査検討を加えている由である。

2 宮城県小牛田町教育委員会「山前遺跡」1976

(佐藤信行)

鉄器・鐵滓の科学的検討にあたって

近年、東北地方における古代の製鉄関係遺跡の発掘がいくつかなされ、⁽¹⁾鉄の生産や鉄器の製作にかかる解明がすめられている。宮城県内においても、白石市深谷の製鉄遺跡が、佐藤庄吉氏により調査され、和島誠一氏が検討を加えられており、昨年には、前述したように、多賀城跡で工房跡と推定される場所から鉄滓・吹子の羽口・坩堝が出土している。⁽²⁾しかし、東北における古代の製鉄法および鉄器製作に関する研究は緒についたばかりで謎が多く、実証的報告が数多く発表されることに期待するというのが実情である。

さて、栗原郡内で出土した奈良・平安時代の鉄器は、前項第10表に示したように、余り多くはないが、古墳関係から藏手刀9振が出土しており、鉄斧2点とともに注意したい。「延喜式」(905年)によれば、古代の東日本、わけても東北地方での鉄の価格は西日本のそれの2~3倍であった(第26図)。それほど貴重だったにもかかわらず、原島礼二氏によれば、第11表で明らかのように、東日本の住居跡出土の鉄器は6世紀に急増し、7~8世紀に漸増、9世紀に至っては住居跡の40%近くから出土するようになるのである。これは武器関係にもいえる。8~9世紀と推定されている県内各地の横穴からは多くの直刀・藏手刀と夥しい数の鉄鎌が出土していて、鉄の普及を物語っている。しかし、県内においてはこれまで、これらの鉄器に対して科



第26図 種物価法 鉄1挺(10斤)の面積(単位束)

原島礼二「文献にあらわれた鉄」より引用

学的検討を加えた報告がほとんどなかったのである。

こういう状況の中で、がんげつ遺跡の住居跡から、数多くの土器・須恵器とともに、吹子の羽口や刀子・鉄錐、そして大きさのまちまちな鉄錐が出土したのである。しかも、明らかに平安前期と推定される住居跡から鉄錐が出土したということは非常に貴重であるといえる。

なぜ、捨て去られた鉄錐が重要なのか。それは、鉄錐が、鉄が製鍊されるときや鉄器が製作されるときだけに発生するからである。つまり、本遺跡においては、鉄器を使用した段階よりも一步進んで鉄器を製作した可能性が生じたことを意味し、あるいはまた、鉄錐の成分や様相、その他の条件が揃えば鉄の製鍊さえ考えられるのである。ここでは、その解明にできるだけ迫りたいと思うが、原鉱の産地をつきとめることができず、その分析をもとに鉄錐との対比ができなかったことを予めお断りしておく。

本稿を草するにあたり、成分分析やX線回析を行なって下さいました東北金属工業株式会社の御厚意と同社源長馬場彦良・浅野健の両氏に厚く御礼申し上げます。また試料作製や顕微鏡

第11表 鉄製農耕具の出土率
原島礼二「文献にあらわれた鉄」より引用

時期	年代	A 住居数	B 出土 住居数	B/A × 100%
五 朝	5世紀	248	5	2.0
和 泉	同後半	76	1(7)	1.8(9.7)
鬼 高 I	6世紀前半	86	10	11.6
同 II	6~7世纪	264	36	13.6
真 間	8世紀	139	26	19.4
国 分	9世紀	221	86	38.9

第12表 鉄 器 の 成 分

No.	出 土 地 と 種 類	分		
		Fe ₂ O ₃	SiO ₂	Mn
G 1	岩石第1号住居跡・刀子	73.35	7.81	0.019
G 2	" · 鉄錐4	57.56	19.71	0.021
G 3	" · 鉄錐5	50.86	22.34	0.031
S 1	三木町混内山横穴・刀子	79.63	4.86	0.012
S 2	" · 鉄錐	76.52	8.82	0.013
2 2	月の輪 中央館 · 剣9			0.057
"	" "		0.30	—
"	" · 剑11			—
3 2 1	常陸 大国村 · 刀(無銹)			0.028
"	" "			—
3 2 2	" · 刀(銹化)			0.019
"	" "			—

註1. G 1~S 2はPの分析をしなかった。又、金屬錐も認められたが錆化著しく、Fe₂O₃で算出した。

註2. 2 2~3 2 2は、和島誠--「鉄器の成分」(「月の輪古墳」所収)による。

写真撮影に御指導御協力いただいた東北大学工学部助教授熊谷一男、岩出山高校中川義二郎、古川工業高校桜井幸喜、茂泉正比呂の各氏、さらには数多くの御教示をいただいた東北大学選鉱製錬研究所助教授岡田廣吉・加藤清一両氏に、記して深謝の意を表します。

鉄器の成分

出土鉄器中、刀子と鉄鎌2点（第23図1.4.5）の定量分析を行なった結果を第12表に示す。
 また、8世紀と推定されている志田郡三本木町の混内山横穴古墳群出土の刀子・鉄鎌の分析も⁽⁵⁾
 合わせて行なったと同時に、参考のため、岡山県の月の輪古墳出土鉄器の分析結果も表に示し⁽⁶⁾
 ておいた。

がんげつ、混内山出土のものは、いずれも錆化がかなりすんでおり、その上砂質の土にま
 みれていたので、ほとんどがゲーサイト（goethite $Fe_2O_3 \cdot H_2O$ ）であり、土中から混入した
 であろう硅酸（ SiO_2 ）もかなり含有されている。

鉄器の原鉱が砂鉄か鉱石かという判断は、山本博氏の反論があるにしても、鉄器含有のマン
 カン（Mn）、銅（Cu）、チタン（Ti）の量がきめ手になっている。それらについて一つ一つみて
 いきたい。

かつて、依国一氏は「現今本邦各所に於て得べき砂鉄鉱に於ては満倣含有量は大概ね痕跡又
 は最も多き場合と雖、0.04%を超える如し。」⁽⁸⁾と論じ、Mn0.04%を基準にした。これはあくま

分析成績						分析者
Cu	Ti	S	Ni	P	C	
0.015	1.12	0.058	0.046		0.79	東北金属工業KK 分析室
0.005	1.14	0.070	0.032		0.73	
0.007	1.03	0.060	0.032		0.84	
0.014	1.18	0.18	0.049		0.52	
0.012	1.26	0.28	0.041		0.49	
0.05	0.26					C・B
0.10	—	0.022		0.021	0.67	A
0.00	0.34					C・B
0.00	0.14					C・B
0.02	—	0.006		0.116	0.15	A
0.00	0.17					C・B
tr	tr	0.073		0.144	1.33	A

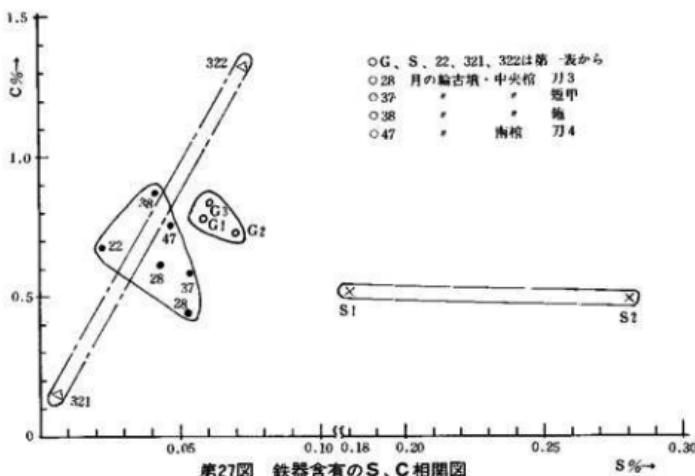
註3. A) 日本鋼管技術研究所 B) 工業技術院資源技術研究所 C) 東大生産技術研究所金森研究室

で一つの目安であるが、がんげつでは0.031%が最高値で、混内山の2例と同じく、砂鉄を原鉱とした鉄製品の可能性が強いといえる。

銅分は非常に少なく、俵氏や和島氏の分析結果とはほぼ同じ結果を得ており、古代の砂鉄を原鉱とした鉄器として普通に見られるものである。それに「銅は精練の過程で鉛滓の方に逃げず⁽⁹⁾に、最後まで鉄の方に残る成分であるから、製品の含有率は原鉱より高くなる」わけだから、がんげつの場合の原鉱はもっと小さな値になる。

さて、Tiの含有量であるが、がんげつ、混内山ともに1%を越えており、月の輪古墳出土中もっともTi含有量の高い鉄器の2倍近くを示し、問題がある。鋳造の過程で増量する可能性は余り考えられないが、砂質の土にまみれていたことを考慮すれば、ある程度の2次的な付加も考えられないこともない。それにしても高すぎる。島根県島上の銅鉄をとるたたら製錬(1200~1300°C)の場合には、「Ti含有量7~8%の砂鉄を使って0.1~0.2%しか残らぬ」といわれていることから、がんげつの鉄器の原鉱は、計算上、余り可能性がないにしても、イルミナイトを想定せざるを得ないほどである。

つぎに、鉄器に含まれている炭素(C)と硫黄(S)の関係を「月の輪古墳」の報告にならって作成したのが第27図である。出土地域毎にあるまとまりが認められて、原鉱砂鉄が同一地域からの採取であることが推測できる。鋳造のため、C、Sが増加する可能性(321,322の例)があるとすれば、がんげつの場合も測定値より少なくなるだろう。混内山の高いS量について



第27図 鉄器含有のS、C相関図

は、現在のところ何とも説明できない。いずれにしても、炭素含有量が1.7%以下なので、鐵
鐵であったことは容易にいえよう。

以上のことから、がんげつ遺跡出土鉄器は、Mn, Cu分が少なく、Ti含有量の極めて高い砂鉄を原鉱としてつくられた鎧鉄を素材にして製作されたものと推定される。

鉛筆の定性分析

出土した鉄滓すべてに対して、直径 5 mm のドリルで任意の箇所から 5 g 程度の粉状試料をとり、分光分析をした結果を第13表にまとめた。輝線（スペクトル線）を強く出す性質をもつ元素やそうでないものもあり、絶対的な含有量とは必ずしも一致しないが、相対的にある程度の判断は可能である。

鉄(Fe)、Si、Tiが主成分と考えられ、ついでアルミニウム(Al) マグネシウム(Mg) カルシウム(Ca)の順に強く検出され、Cuは辛うじて認められるという程度である。また微量ながらバナジウム(V)も検出でき、原鉱は砂鉄であることが推定される。

Si, Al, Mg, Caはともに原鉱中にも、炉材にも含まれており、酸素(O)と化合して SiO_2 ・ Al_2O_3 ・ MgO ・ CaO なる造渣化合物をつくり、一般にFeの酸化物が多いときは少なく、少ないときは多くなる。現代の製鍊では、石灰石(CaCO_3)などの溶媒剤を意識的に加えるのであるが、古代においては原鉱や炉材がその役割を負っていたのである。^四

試料により若干の違いがあるにしても、ほとんど同じ成分傾向を示し、同一原鉱で、しかもTi量の高い赤目系の砂鉄を用いたものと考えられる。

第13表 鉄滓の分光分析 (東北金属工業KK分析室)

試 料	檢 出 元 素																	
	S i	M n	C u	C r	W	M o	N i	C o	V	A l	F e	T i	M g	P b	S n	Z n	C a	N a
試 料 A	+++	+	t	t	-	t	t	t	++	++++	++++	++++	++	-	-	-	++	+
B	+++	+	t	t	-	t	t	t	++	++	++++	++*	+	t	t	-	++	++
C	+**	+	t	t*	-	t	t*	t	++	++	++++	++++	++*	-	-	-	++*	+
D	+++	+	t	t	-	t	t	t	t*	++	++++	++*	+	t	-	-	++	++
E	+++	+	t	+	-	t	t	t	++	++	++++	++*	+	t	t	-	++	++
F	+++	+	t	t	-	t	-	t	++	++	++++	++*	+	t	t	-	++	++
G	+++	t*	t	t	-	t	-	-	++	++	++++	++*	+	t	-	-	++	+
H	+++	+	t	+	-	t	-	t	++	++	++++	++	+	t	-	-	+	++*
I	+++	+	t	t*	-	t	-	-	++	++	++++	++*	+	t	-	-	+	+
J	+++	+	t	+	-	t	-	-	++	++	++++	++*	+	t	-	-	+	+

記号 1. + + + スペクトル强度 (上体元素) 3. + + + スペクトル强度 (小體元素) 5. + + + スペクトル强度 (微體元素)

6.6 ベンチマーク実験 (測定精度評価) Trace × すべて選択する (一)

7. 一スペクトル輪説め出ない 8. 上放起説との由因標

◎ 森林物种多样性与森林健康

鉄滓の定量分析

出土鉄滓中、楕形鍛治滓に類似した形状をもつAと、表面が焼けただれたようによつぶつとした小孔のあるCについて定量分析を行なった。ついで、それらがどのような形状をもって鉄滓を構成しているか、粉末X線回析により構造解析を試みた。さらに、A、CとFについて顕微鏡（反射式と透過式）観察と写真撮影をして鉱物学的検討を加えた。

まず、鉄滓A、Cの中央部から30g程の試料を採取し、Fe、Sは湿式化学分析、 TiO_2 、 SiO_2 、 Al_2O_3 の酸化物は蛍光X線分析で求め、他は原子吸光で検出し、Ca、Mgは各々 CaO、MgOとして算出したのが第14表である。また、参考のために国内の製鍊滓・鍛治滓の成分結果も合わせて表に示した。その結果は当然のことながら定性分析結果にはば一致した。

試料A、Cとともに全鉄量(T·Fe)が高く、造滓成分(SiO_2 、 Al_2O_3 、CaO、MgO)はそれぞれ、26.23wt% (重量パーセント) 20.31wt%と、T·Feの52%、38%にすぎず、鍛治滓や古い製鍊滓に類似した値を示している。また、 TiO_2 が6.68、3.68wt%と、近世の鍛治滓よりは比較的高く、製鍊滓としては低い。ただし、出土鉄器とこの鉄滓の原鉱が同じと考えれば、鍛治滓としても不自然なほど高い量とも思えない。Mn、Cuは定性分析から予想された通りの小さな値であった。

第14表 鉄滓の成分

No	採集地	分				
		T·Fe	FeO	Fe_2O_3	M·Fe	SiO_2
G·A	岩石 第1住居跡出土鉄滓A	5.009	51.64	14.21		18.65
G·C	" " C	54.11	43.42	29.09		14.85
T	藤岡市伊沢 (古い製鍊滓)	46.86	51.10	9.89	0.22	17.72
S	鳴子市白石 (新しい製鍊滓)	36.62	30.37	17.03	1.11	20.86
I 3	砥波鉢下り (出雲たたら岸)	27.20	30.76	4.62	-	41.30
O 1	小田原市西匂 (鍛え鍛治滓上面)	54.84	37.24	26.18	7.47	17.2
O 2	" (" 中面)	50.57	52.48	-	1.28	21.05
O 3	" (" 下面)	41.71	44.69	-	-	30.42
K	国分寺市8号住居跡 (小鍛治滓)	56.42	62.78	15.52	0.77	13.06
M	一関市舞草鉄落 (鉱石製鍊滓)	50.77	48.64	17.72	0.56	19.85
A	青森県大館森 (砂鉄+鉱石?)	51.38	44.89	23.64		14.96

(註1) $Fe + Fe^{++}$ は FeO と金属鉄(M·Fe)を FeO wt%として算出。 Fe_2O_3 は Fe^{++} を Fe_2O_3 wt%として算出。

(註2) 酸化物の形、あるいは金属状の表示は分析法の結果であり、実際の形状は不明。

鉄滓の粉末X線分析

化学分析に示されるこれらの元素や酸化物がどのような形で鉄滓を構成しているかを知るために、同一試料を粉末にし、Feをターゲットとしたディフラクトメータ(X-ray diffract meter)を用いて鉱物組成を同定した。定量分析と同じく鉄滓のごく一部の分析なので、これをもって全体を説明するのは危険であるが、基本的なことはいえる。(第28図)

試料Aで最も強く検出されたのはウスタイト(Wustite· FeO)であり、つづいてマグネタイト(Magnetite· Fe_3O_4)が検出され、これらはフェアライト(Fayalite· $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$)でつながれている。試料Cの場合は、 FeO と Fe_3O_4 がほぼ同じくらいの強さで検出、 $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ がやはりバインダーの役割を果たしているのがわかる。

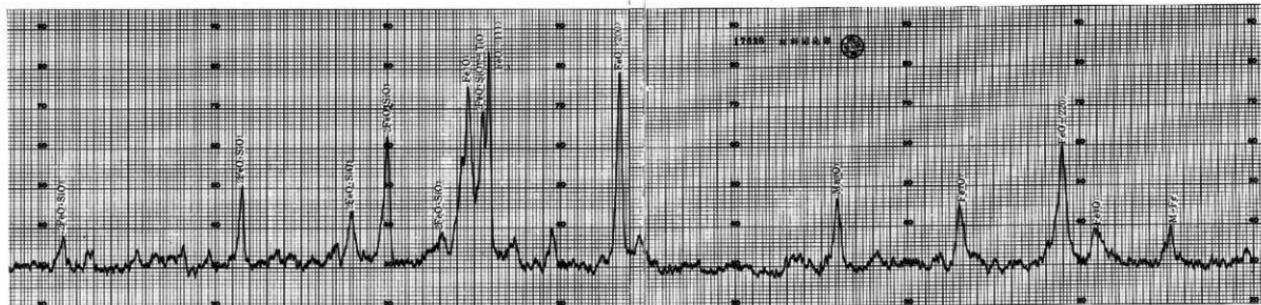
このように、たとえ成分分析で、 FeO 、 Fe_3O_4 がある量で存在しても、実際は FeO と Fe_3O_4 の形で含有されているのである。これは成分分析の際、 Fe^{2+} 、 Fe^{3+} のイオン量を測定して、 FeO 、 Fe_3O_4 に換算して表を作成しているからである。また、本試料ではゲーサイト($\text{Fe}_3\text{O}_4 \cdot \text{H}_2\text{O}$)はほとんど検出されず、金属鉄(M·Fe)は痕跡程度であった。比較的多く含まれているTiは TiO_2 、 Ti_2O_3 、 Ti_3O_5 の形でフェアライトの一部に散在しており、さらにMn、Mg、Alはそれぞれ MnO 、 Mn_3O_4 、 MgO 、 Al_2O_3 という酸化物で造作部分を構成していることが確かめられた。

(岩石鉄滓は東北金属工業KK分析室で分析)

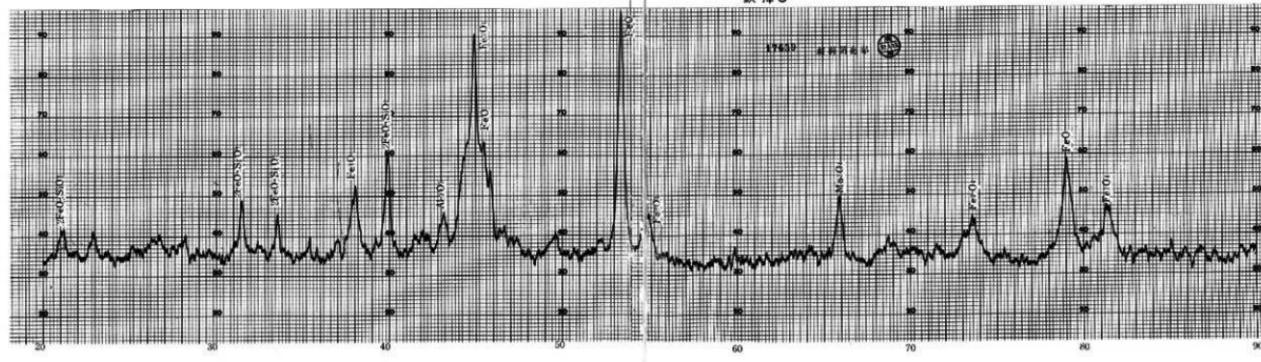
析成分											
Al_2O_3	CaO	MgO	MnO	TiO_2	Cu	S	Ni	Co	Cr	P	
5.21	1.512	0.86	0.234	6.84	0.008	0.031	0.027	0.041	0.007		
3.68	1.064	0.72	0.117	3.68	0.011	0.054	0.022	0.035	0.024		
4.80	2.00	3.40	0.57	7.17	0.008	0.019				0.164	
7.79	2.60	2.84	0.66	14.98	0.002	0.057				0.105	
9.21	1.49	—	1.16	9.15	—	—				0.03	
3.20	2.85	1.20	0.14	1.02		0.015				0.138	
6.48	3.84	1.36	—	0.33		—				—	
6.81	4.26	2.26	—	0.58		—				—	
6.28	1.80	1.11	0.09	1.51	0.019	0.022				0.103	
4.78	1.70	1.02	0.1	0.35		0.15			0.15	1.1	
3.89	1.58	1.28	—	1.30		0.276				0.218	

(註3) T, S, I, Kは窪田藏郎「発掘鉄滓の考察」(考古学ジャーナル)124 1976
O, M, Aは窪田藏郎「鉄の考古学」(雄山閣1973)による。

鉄 淬 A



鉄 淬 C



第28図 鉄滓のX線回析 (東北金属工業KK分析室)
ターゲット: Fe

鉄津の顯微鏡組織¹⁶

鉄津 A、C、F を図版 12、13 に示す a-a'、c-c'、f-f' 面で切削して研磨した。研磨面は図版 14、15、16 の拓本から明らかのように、大きさの異なる多数の小孔をもつ、かなりボーラスな様相を呈しており、さらに鑄造鉄津独特といわれる紫黒色のない金属光沢を有しているのが確かめられた。

また、一部に粘土をかみこんでいる平たい孔もあり、全体的に無秩序な感じを与えるが、これは形成温度等に関係するのだろうか。拓本に番号を付した部分の反射顕微鏡写真が図版 14~16 である。また、各試料毎に 1、2 枚の透過（偏光）顕微鏡写真も合わせて掲載しておいた。

写真でも明らかなように、同一鉄津でも、その位置によってかなり異なる様相の組織が観察される。それだけ偏析がはげしいのである。従って、報告書等に発表された 1~2 枚の写真とごく一部分の成分分析だけで鉄津全体の判断をするのは極めて危険なことといわねばならない。

a 鉄津 A の場合（図版 14）

上部（A-1）は白く見える多くのウスタイトが、大きな粒状となり互いに隣接しているのが観察され、わずかにフェアライトが見られるだけである。下方になるに従い（A-2、A-3）やや暗い灰色の柱状のフェアライトが多くなり、白色のウスタイトが樹枝状あるいはぶどう状にきれいにならんでいるのが認められる。また、透過顕微鏡で、Ti 組物がフェアライトの一部に細く柱状に走っているのが観察された。

b 鉄津 C の場合（図版 15）

鉄津 A と同じように、上方（C-1）には白く大きな粒状のウスタイトが多く、下方にいくに従い、樹枝状やぶどう状のウスタイト、マグネタイトが、フェアライトを地として観察された。また、三角形状をしたマグネタイトや、大きな球状のゲーサイトが透過顕微鏡で認められた。さらに、Ti 組物は透過顕微鏡で紫色を呈するが、鉄津 C でも観察された。

c 鉄津 F の場合（図版 16）

鉄津 A、C とは幾分その様相を異にしている。F-1 ではスラグの中から微細なウスタイト、マグネタイトが晶出しており、F-2、F-3 では、三角形や四角形など多角形状のマグネタイトと小さな粒状のウスタイトが、短柱状の大結晶フェアライトを地として観察された。A、C よりも高い形成温度だったと推定される。

なお、ウスタイト、マグネタイトの区別を顕微鏡観察のみで同定するのはなかなか困難なので、今回は第一塩化ズズ(SnCl₄)の 1% HCl 鮑和水溶液でエッチングして識別した。¹⁷マイクロアナライザーでさらに微量分析をすれば、明確に識別できようが、形状や反射度だけで判断するのにはかなりの熟練を要するものと思われる。

さて、以上の顕微鏡観察から、鉄津の上部がほとんどウスタイト（FeO）組織であり、下方

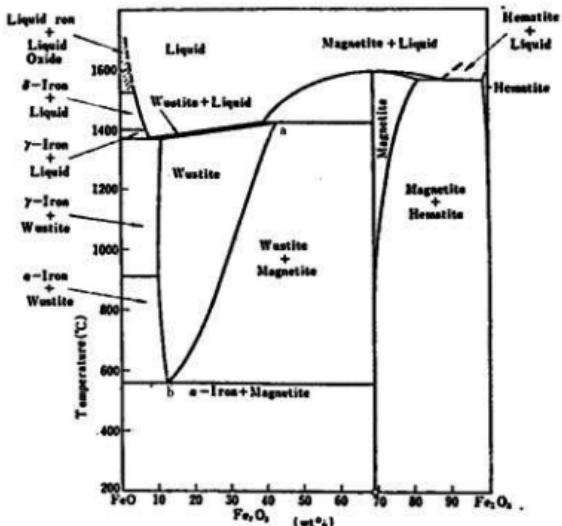
にいくにつれて少しずつ FeO が減り、フェアライト ($2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) が出る組織へと変化しているのがわかる。現在のところ、製鍊滓の場合に、 FeO がほとんどを占める組織についての報告がないこともあり、むしろ鉄があってそれから生成した鉄滓ではないかと考えられる。つまり、²⁹ 製鍊された鉄が、再溶融あるいは鍛造途中に酸化されて生じた組織で、鍛冶滓と推定できる。

鉄滓形成温度

鉄滓の形成温度を知ることは当時の技術を知るために極めて重要である。鉄滓の融点から、製鍊温度あるいは鍛造温度を即決することはできないが、それ以上であるという意味がある。

試料 A、C、Fともにかなりの偏析が認められ、いちがいに判断できないが、A、Cには晶出マグнетイトが観察されない（第29図の状態図において、固相線 a-b に沿ってウスタイトから析出するマグネタイトはあるが）ので、まず、Aについて $\text{FeO}-\text{CaO}-\text{Al}_2\text{O}_3-\text{SiO}_2$ 系状態図を用いて融点を求めてみる。

MgO は CaO と同等に考えると、分析値は $\text{FeO}: 51.64\%$ 、 $(\text{Ca}, \text{Mg})\text{O}: 2.37\%$ 、 $\text{Al}_2\text{O}_3: 5.21\%$ 、



第29図 $\text{FeO}-\text{Fe}_2\text{O}_3$ 系状態図

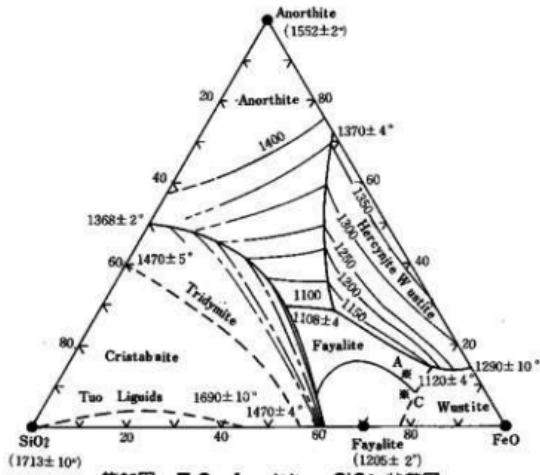
日本学術振興会製鉄第54委員会編「焼結鉱物組織写真および識別法」より引用

SiO_2 : 18.65%であるから、これらの相対比率は $0.664 : 0.030 : 0.067 : 0.239$ になる。そして、これは第30図の $\text{FeO}-\text{Anorthite}(\text{CaO}\cdot\text{Al}_2\text{O}_3\cdot 2\text{SiO}_2) - \text{SiO}_2$ 系状態図で、 $\text{FeO}=66.4$ ・ $\text{Anorthite} \approx 16.0$ ・ $\text{SiO}_2 \approx 17.6$ の組成になって図中 A にあたり、融点として $1100 \sim 1120^\circ\text{C}$ が得られる。図版 A-3 あたりに相当するが、A-1 のようにウスタイトだけという場合もあって偏析が著しく、化学分析値が鉄津のごく一部の組成しか示していないことを物語っている。

同様に、C の場合は、第30図 C に位置している。この結果と顕微鏡観察で樹枝状のウスタイト、および柱状のフェアライト大結晶が認められることから、融点は $1170 \sim 1180^\circ\text{C}$ と推定することができる。

しかし、試料 F の場合はマグネタイトの晶出が認められるので、 1300°C 前後のかなり高い温度で形成されたものと考えられる。

以上のことから、鉄津形成温度は 1200°C 前後であり、場合によってはもっと高い温度で形成されたものもみられ、自然送風ではなく、人工送風で炉温をあげたものと推定される。



第30図 $\text{FeO}-\text{Anorthite}-\text{SiO}_2$ 状態図

酸性度と $TiO_2/T \cdot Fe$ の関係について

鉄滓に含有されている元素や化合物の量から、製鐵技術や年代がわかるだろうか。

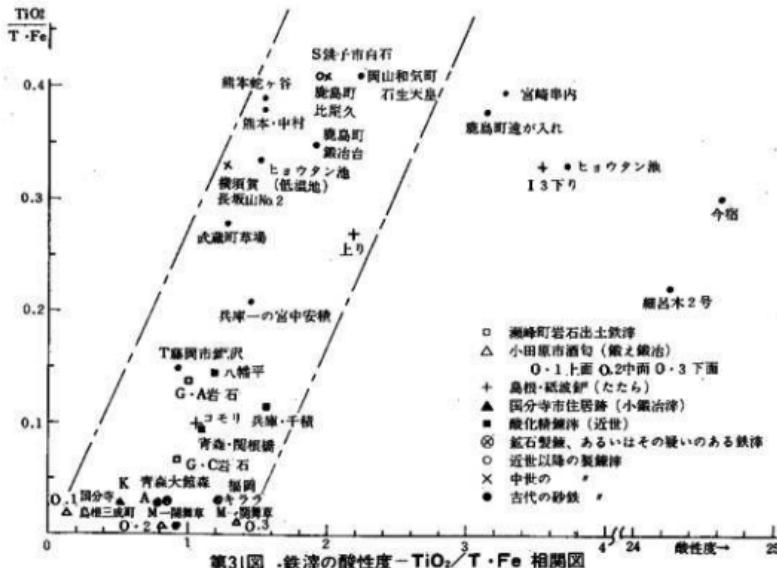
窪田藏郎氏は、酸化チタン (TiO_2) と全鐵量 ($T \cdot Fe$) の相関関係を作成し、顕微鏡観察をも合わせて「その技術水準から極めて大雑把な推定をなし得る程度で、細かい編年や絶対年代を求めるることは現状では不可能である。」と断じながらも、推定目安を示して参考になる。

筆者はこれにさらに酸性度 (Acidity) という概念を導入して、酸性度と $TiO_2/T \cdot Fe$ の相関関係図の作成を試みた。それが、第31図である。なぜ、酸性度を用いたかというと、種々の鐵滓（鐵滓のみでなくいろんな金属の滓についてもいえるのだが）を比較するためには、完全な化学組成は余り便利でなく、スラグの相対的特性をあらわす酸性度の方が有効であるからである。現代の工場製錬法で発生するスラグの酸性度は0.5から3.0までの範囲内で変化するという。

原鉱に含まれる Ti 量や操業時の条件、さらには炉材等、地域によっての相違がかなり大きいにしても大よそつきの事がいえる。

① 比較的新しい砂鐵製錬滓の場合は、 $TiO_2/T \cdot Fe$ が高く、酸性度が大きい。つまり鐵滓中の TiO_2 や SiO_2 が多く、 $T \cdot Fe$ が少ない。鐵の回収がすんだ状態とみられる。

② 古い時代の製錬滓やこもり期の近世たら滓は $TiO_2/T \cdot Fe$ がそう高くなく、酸性度も1前後の中性スラグといえる。鐵の回収がそうすんでいない状態とみられる。



第31図 鉄滓の酸性度 - $TiO_2/T \cdot Fe$ 相関図

- ③ 古代における鉱石製鍊滓は TiO_2/Fe が極めて低く、酸性度は②と同じくらいである。 T/Fe が高いというよりは TiO_2 の量が少ないのである。
- ④ 鍛冶滓の場合は②と③の中間に属し、近世たたらの酸化精錬期の発生滓は酸性度1前後、 TiO_2/Fe 0.1前後を示している。
- しかしながら、鐵滓のごく一部分の成分分析でもって、年代などを推定することは困難、かつ危険といえる。鐵滓の外貌、顕微鏡組織、さらに造構のあり方などとともに総合的に判断しなければならない。
- 試料A、Cは計算の結果、図中に示される位置にあり、④か②に属するといえるが、住居跡から小型羽口とともに出土したことや、外貌、顕微鏡観察の結果を総合的に検討してみると、鍛冶滓であることがいえる。

まとめ

がんげつ遺跡住居跡から出土した鐵器・鐵滓について、科学的分析を行なったが、以上の二点から、つぎのようにまとめることができる。

- ① 出土土器の編年から、鐵器・鐵滓ともに平安初期から前期にかけての遺物といえる。
- ② 成分分析の結果から、鐵器・鐵滓ともに、同一原鉱を用いたとはいえないにしても、赤目系砂鉄を原鉱にしたと推定することができる。
- ③ 遺構から鍛冶用と思われる吹子の羽口が出土したことと、鐵滓の外貌や成分分析、顕微鏡観察から、これらの鐵滓は鍛冶滓と判断できる。
- ④ 鐵滓の形成温度は1200°C前後であり、中にこれより高い温度で形成されたものもあると推定される。
- ⑤ ③④から、鍛冶用の炉床の温度は1200°C前後であり、羽口の特徴とも合わせて、人工的送風がなされたと考えられる。
- ⑥ この住居跡が鍛冶工房であったかどうか連続はできないが、少なくともこの集落地に鍛冶工房があったことはまちがいないといえる。

(鴨田勝彦)

註

1. 戸沢武「大館森山・大平野製鉄址について」『岩木山-岩木山麓古代遺跡発掘調査報告』(岩木山刊行会)1968 平安末期から鎌倉時代と推定されている製鉄遺跡群。
- 田中正能「中棚遺跡」「東北自動車道遺跡調査報告書」(福島県教育委員会・日本道路公团)1975 鍛冶工房的性格の強い住居跡が確認されている。
- 新沼義大「岩手の製鉄歴史」1975 岩手県における古代-近世の製鉄遺跡・製鉄技術に広く

触れている。鉱石製錬について特に詳述している。

2. 和島誠一「製鉄技術の展開」『日本の考古学』VI歴史時代(河出書房)1967 深谷タカラ、白石市深谷の大太郎川流域を中心とする一大製鉄遺跡群であり、下館遺跡のように製鉄場と鍛冶場が結合したものも考えられている。
3. (前項註1)『多賀城跡第28次調査現地説明会資料』1976
4. 原島礼二「文献にあらわれた鉄」『日本古代文化の探求—鉄』(社会思想社)1975 さらに土井義夫・宮原武夫・高橋一夫氏が実証的検討を加えて補正している。
5. 宮城県三本木町文化財調査報告第3集『青山・混内山横穴古墳群』(三本木町・同町教委)1975
6. 和島誠一「鉄器の成分」『月の輪古墳』1960
7. 山本博『古代の製鉄』(学生社)1975 氏は竜田山などの例をあげ「砂鉄とか岩鉄という区分はさほど重要でなく、重要なのはどんな元素をどれほど含んでいるかということである」と指摘している。筆者も基本的には賛成(原鉱の成分量に地域差がある)だが、一般的の傾向として、Ti、Cu、Mnなどの量から、かなりの程度判断できることは無視できない。
8. 依国一「再び古墳発掘の直刀に就き」『鉄と鋼』(日本鉄鋼協会)5-8
9. 和島誠一「前掲書」P243 10. 同 P243 11. 同 P244
12. 炭素(C)の含有量でつぎのように区分されている。鍛鉄: 0.04%以下、鍛鉄: 1.7%まで
鉄: 1.7%以上。
13. 長谷川兼彦・和島誠一「たたら製鉄鉱滓の研究」『資源科学研究所彙報68』1967
14. 渡田藏郎「発掘鉄滓の考察」『考古学ジャーナル124』1976.
15. 同『鉄の考古学』(雄山閣)1973
16. 淡秀雄・佐々木稔「タカラ製鉄鉱滓の鉱物組成と製錬条件について」『たたら研究』14
長谷川・和島『前掲書』や各種報告書を参考にした。
17. 窪田藏郎『前掲書』P210
18. 日本学術振興会製錬第54委員会編『焼結鉱物組織写真および識別法』(日刊工業新聞社)1968
19. 中國工業技術試験所、横川清志氏の御教示による。
20. 日本学術振興会製錬第54委員会編『前掲書』P36
21. 淡・佐々木『前掲書』P95にならい計算をすすめた。
22. 窪田藏郎『前掲書』P164
23. 窪田藏郎、前掲「発掘鉄滓の考察」
24. 酸性度(Acidy)は塩基性酸化物(CaO、MgO、FeOなど)の酸素の質量に対する酸性酸化物(SiO₂、TiO₂など)の酸素の質量の比で表わされる。
25. ポゴレールト・鈴木隆三訳『製錬法の理論』(アグネ)1973 P69

4 陸奥国新田郡仲村郷との関連

1 奈良時代には、その当初建郡された地域で「郷里制」という村落制度が実施されていた。この制度は、數度の改正が行なわれ、天平12年（740）以降は「里」が廃止されて「郷」だけとなった。「郷」は通常50戸の郷戸から成り、2郷以上で1郡を構成した。

奈良時代前半には、宮城県の北部地方に牡鹿、小田、新田、長岡、志太、玉造、富田、色麻、加美、黒川と遠田の計11郡が成立しており、奈良時代後半には栗原、桃生等の諸郡が建郡されている。このうち瀬峰地方に關係があるのは、栗原、新田両郡であろう。

平安前期に、源順によって編纂された「倭名類聚鈔」（和名抄と略す）には、栗原郡に栗原、清水、仲村、会津の4郷が、新田郡には山沼（小沼か）、仲村、貞沼、余戸の4郷がそれぞれ記載されている。「和名抄」のこれらの郷は、その存在を具体的に立証する遺物、遺構が乏しい。ただ「仲村郷」についてだけは、それを示す物的証拠が隣町の田尻町から出土している。それは木戸瓦窯跡から発見された奈良時代前半の平瓦で、それにはヘラで文字が書かれ、「（上欠）郡仲村郷他辺里長 二百長 史部皆人」とある。郡の上欠の部分については、栗原、新田等陸奥国3郡が考えられるが、高橋富雄氏は、地理的関係や皆人の官職等から、これを「新田郡」であろうと推定された（註1）。仲村郷についても、瀬峰町南部の旧中村地区であろうとされているから（註2）、瀬峰町一帯の律令化は、天平12年以前に、郷里制や軍制において確実に実現していくことになる。この文字瓦は、陸奥国府多賀城とその付属寺院の創建の瓦（多賀城1期）と同じものである。

2 ところで、奈良、平安時代の新田郡の郡域であるが、現在ほとんど不明である。しかし、平安初期の延暦18年（799）には、新田郡に讃馬郡を併合しているので、当時の郡域が從来よりも東方に広がって、現在の追町佐沼方面にまで及んだことは知られる。「和名抄」の新田郡にみえる「山沼郷」が「小沼郷」の誤記だとすれば、そうした状況を傍証するものであろう。一方、新田郡の南部地域は、これを地理的な面から推定すれば、田尻町を中心に、小牛田町北部の一部、高清水町西部の一部まで含む範囲と推定される。以下、瀬峰町が、奈良・平安時代に新田郡に包含されていたと考える理由を記してみよう。

- (1) 新田郡の中心たる新田柵（新田郡家）の擬定地との距離的関係。新田柵等は田尻町小松、八幡地区とされているが、そこと瀬峰町の中心とは直線距離にして約2kmの至近である。
- (2) 「中村」の地名は現在も、瀬峰町南部の上荒町、下荒町一帯を總称するが、これは明治以降のものではなく、中世～近世の遺名である。「藤原村史」（註3）中の高橋氏家譜中に時景 大崎多田安芸守義高公之家臣也 一万刈之知行押領 中村居住 虎溪寺之開基 永正二年四月十一日没（下略）”

とあり、中世後半に既に「中村」の地名が見える。これをすぐ古代の郷名に結びつけることは危険だが、遺名の可能性がある。ちなみに『藤里村史』には、上荒町の虎渓寺を中心とした地域に、元弘、正安、応仁、元亀等13~16世紀の和年号の古碑群が多数あったという。（村史に古碑の略図と碑文が載っているか現存しない。）これらの古碑群も中世初頭以降の「中村」に関連する人々のものであったろう。

(3) 小山田川と追川の中間には、標高40~60mの丘陵地帯が幅3~4kmにわたって続いているが、この地域での遺跡の分布はほとんど認められない。これを、自然地形を利用した当時の栗原、新田両郡の郡界とみる。ちなみに、小山田川流域と追川流域とでは、奈良・平安時代の遺跡の分布が異なり、圧倒的に小山田川流域に濃い。これを新田、栗原両郡の間の集落の発達の差、建都時期の差に関係づけて考えることもできる。

(4) I の 2 でふれた瀬峰町神田遺跡出土の瓦の存在も無視できない。この瓦は一見して田尻町木戸窯跡の瓦と同じである。この瓦は焼き割れがあり実用に耐えないから、神田遺跡付近で生産したものか、木戸の瓦をここに運び込んだものと見ることができる。いずれにせよ、新田郡に属する木戸窯跡とこの神田遺跡との間には有機的関係があったと考える。なお、小山田川流域の北では、多賀城 I 期の瓦の存在は確認されていない。

4 ところで、古代の新田郡仲村郷とがんげつ遺跡とは、どのような関係があったのだろう。先にもふれたように、「和名抄」によると平安前期の新田郡には4郷あった。これを県北の他の諸郡と比較してみると、栗原、牡鹿、桃生の諸郡はいずれも3~4郷から成り立ち、郡の規模はほぼ等しい。また、これについて現在の行政上の町村の数を勘案してみると、2町村に1郷位の割合であったことになる（勿論、地理的環境により左右されるから、一概にはいえない。条件のよい広い面積を有する町には、2郷位ある場合もある）。とすれば、瀬峰町のような耕田面積の狭く、村落立地の地理的条件の悪い町に2郷も形成されたとは考えられない。

また町内の旧中村と旧富村とを区画する地理的制約もないで、当時の仲村郷は現在の瀬峰町のほぼ全域を包含していたと考えてよいだろう。従って旧富村に属するがんげつ遺跡も、仲村郷を構成する集落の一つであり、遺物、遺構等から見て、寺沢丘陵に群在する遺跡群の中心的集落であったと推定される。がんげつ遺跡から出土した土器の「中」のヘラ書き文字も、仲村郷の郷名に関連するものと考えられる。

(金野 正・佐藤信行)

註

1、2 高橋富雄『蝦夷』吉川弘文館 1963年

3、栗原郡藤里村誌編纂委員会『栗原郡藤里村史(上巻)』 1922年

5 まとめ

1. がんげつ遺跡は、宮城県栗原郡瀬峰町大里字富岩石にあり、寺沢丘陵に立地している。
2. 発掘の結果、ほぼ方形の周溝で囲まれた竪穴遺構を検出し、少なくとも3棟の竪穴住居跡の重複をみとめた。
3. 竪穴住居跡は平安時代の表衫ノ入期に属し、9世紀初頭から10世紀頃まで使用されたと推定される。
4. 竪穴住居跡から、多数の遺物が出土した。土師器、須恵器、鉄器、鐵滓等である。
5. 土師器で「中」と刻字された坏が出土した。
6. 鉄器、鐵滓は赤目系砂鉄を原鉱としたと推定される。
7. 鐵滓は鐵治滓であり、炉床には人工的送風がなされたと考えられる。
8. がんげつ遺跡は、奈良・平安時代の陸奥国新田郡に属し、仲村郷の中心集落であったと考えられる。
9. がんげつ遺跡は、奈良・平安時代の陸奥国の律令化過程を考える上で極めて重要な遺跡である。

付 章 がんげつ遺跡発掘に参加して

『がんげつ』発掘に思う

二上 鎮雄

『がんげつ』はかつて、瀬峰町史編纂当時、平重道先生や加藤孝先生に、しばしばお見せした土器、石器を拾った山であり、佐藤信行氏の数度にわたる踏査の結果、「この辺にこんなに広範囲に遺物の出るところは少ないですね」と言わしめた場所でもある。

そして又、郷土研究会では、幾度となく実地調査をして、やがて開田されるという噂に、何とかその前に確たる場所を探して、町内初の発掘をしてみたいという、燃える希望をもったところでもある。

昭和49年春、佐々木徳雄氏は、綿密周到な調査を行ない、その結果、岩石南端の農道をはさむ、約7.5m²の採草地を遺跡の一部と判断した。そこで、町教育委員会と文化財保護委員会とが協議の結果、今後の遺跡の保存と、破壊されつつある遺構の保存という観点から、発掘調査が計画され、5月17日から同29日まで、延7日間、発掘作業を実施し、予期以上の成果をおさめて幕を閉じたのである。

その後、一年有余、三宅、佐藤両氏を中心とする調査團により、今回、この報告書が公刊される運びとなったのであるが、その内容は、まさに微に入り細にわたって余すところなく記されていて、一読當時を思い出し、往古のことなども想像されるのである。発掘現場は作業終了と同時に整地されたが、しかしこの報告書がある限り、がんげつの実情は、ながく江淵に残ることであろう。

今、発掘当時を回顧して、当町初めてのこの事業を遺憾なく完了させて下さった諸先生方の御厚意と御指導に対し、深甚なる謝意を表するとともに、なにかと始終お世話下さった佐藤氏、また、炊事一切を引き受けお力添えをいただいた、篠川、佐々木両女史に対しても、衷心から御礼を申し上げるものである。

『がんげつ』発掘に当つての所感

佐々木 尚見

わが町瀬峰町の古代遺跡については全く知られていなかったと言つても決して過言ではない。事実、町史にも「奥谷地区の愛宕神社付近、鼻かけ付近からは縄文土器が出土し、貝塚らしいものが存在した」というが今は破壊されてしまった。その他藤沢の館山、富の丘陵、四ッ塙からも土器、石器の破片が出でているが恐らく集落があったものと思われるが、全貌は明らかで

ない。」としか書かれていません。

それが、この度の「がんげつ遺跡」の発掘によって約1000年以上も昔に富の丘陵に人間が居住し、それがある程度の集落を形成し、高い文化をもったものであることが明確にされたのである。1000年以上もの昔、この地方を支配していたのは、いわゆる「蝦夷」と称された民族で文化の程度も低く野蛮なものといわれ、現在でも多くの人がそう固く信じている。それが、当町内でも鉄文化を持ち、須恵器を使用していたのだ。決して「蝦夷」ではなかったのだ。

この程度の発掘でなくもっと大々的な発掘をしたら、あるいは更に何かがと夢はひろがる。この壯挙が町内に与えた影響も大きい。その一つは、古代に対する関心に大きな変化のことであろう。あるいは、これが黎明かも知れない。これを転機として、今までほとんど古代遺跡のない町に近かったわが町で、朝に一つ夕に二つと遺物包含地が発見されている。そしてわが町と境を接している高清水町、田尻町の諸遺跡との関連の解明が必要とされてくるだろう。

統日本紀の天平9年に新田柵が置かれたと書かれ、現在のところ田尻町がその擬定地とされているが確実ではない。当時には現今のような行政区界はない。当町の四ッ塚、長根、荒町、二代、高清水町の外沢田、観音沢、田尻町の犬狗堂山、八幡山の諸遺跡はすべて指呼の間にあら。これらは無関係だった、往来もなかったとは到底考えられない。

一度灯された火は消してはならない。

長く燃え続けさせ、私たちの郷土の古代が明かになるよう念じて止まない。

『がんげつ』発掘と旧富村について

篠川トミコ

岩石と書いて「がんげつ」と読む。

この地域一帯に堅穴住居の集落があったことは、5、6年前より二上鎮雄氏の調査により判明していた。その範囲は広範囲にわたっていて、西は菜沢より岩石・清水山・長者原と東西約4kmぐらいになる。この土地からは、折にふれ、土師器・須恵器・石器・蕨手刀等が発見されていた。この中で一番条件のよい「がんげつ」の堅穴住居跡を発掘したのである。その状況や結果については諸先生方の報告の通りであるが、私はこの発掘結果について自分なりに思うことを述べてみる。

がんげつ、この地域は瀬峰町中央を東西に走る丘陵のはば中間に当たり、旧富村に属し、旧藤沢村と境を接した南斜面地になっている。

旧富村の名称の出来について、大正11年発行の藤里村誌上巻168頁富村の部に、「富は旧所相続で人口富足りしより負へる名にや、亦万葉集なる『いめたててとみの岡への』と見えたる

名義にも同じならんか、識者の追考を持つ（『旧地考』）」「後方の大森山より富士山を望み
たり故に富と名附く（『傳説』）」とある。

この度の発掘調査により、「入口が富足りていた」という富の名の起源があてはまる、と私は思う。前にも述べた通り、がんげつを中心としてこの丘陵一帯は、古代人の豊穴住居跡が方々にあり、集落をなしていたと思われるので、古代としては、入口富足りた地域であったろう。

また、万葉集に「いめたてて跡見の岡へのなでしこの花、ふさ手折り我れは行きなむ奈良人
のため」とある歌は「万葉集卷八（秋の雄歌）」の中にあり、詠人は典鏡正、紀朝臣鹿人で、
衛門大尉の大伴宿禰公の跡見の領地に行って作った歌である。この歌で、いめ（射日）は跡
見にかかる枕詞であって、その意味は狩りの時鳥獸を射るため隠れてのぞく設備である。跡見
とは、狩猟の時鳥獸の通った跡を見てその行方を考えること、または狩猟をする場所のこと
である。この場合は場所があてはまる。昔は狩猟場を跡見と言ったのである。

旧富村の丘陵地帯にある豊穴住居に住んでいた古代人は、狩猟を主とした人々であるように私には思われる。そしてまた、跡見が富と変化したとすれば、富村の名称の由来は万葉の歌のなかに求めるのが一番ふさわしいようである。それに、この歌の詠人は紀朝臣鹿人で、この人の職業は典鏡正である。この度発掘した豊穴住居跡からは鍛冶工房を思わせる遺物も出土している。また、この歌にある跡見の領主は大伴宿禰公である。大伴氏の一派には、東北と無関係ではなく、陸奥按察使と陸奥鎮守將軍を兼任して桃生城の蝦夷を討伐した人や、わが町に関係のある武烈天皇につかえた人もいるのである。

想像すればきりがない。

しかし、がんげつも、もっと深く調べることにより、東北古代の鍵を開く一端となるのではなかろうか。

年 表

西暦年	時代	時期	主な特徴	主要遺跡		
				瀬峰町	栗原郡	
紀元前 8,000	先 土 器 時 代	後期	打製石器の使用 狩猟・採集の生活 石槍・細石器		草木大滝(花山)	
6,000		早期	土器の製作、使用始まる 石鏃、磨製石器の出現		大穴山(花山) 大寺(高清水)	
1,000		前期	集落の拡大			
		中期	縄文土器の発達 貝塚の急速		嘉倉(篠館) うなぎ沢(篠館)	
紀元前		後期	漁労貝の発達 龜ヶ鼻文化の盛行	がんげつ		
		晩期	龜ヶ鼻文化の盛行	泉谷鼻欠	山王(一迫)	
紀元0	弥 生 時 代	中期	稻作農業の始まり		青木畑(一迫) 山正(一迫)	
紀元後 300		後期	穀物、金属器の伝播 石器の使用とだえる	大鶴谷	上ノ原A(一迫) 大穴山(花山)	
400	古 墳 時 代	前期	古代国家の成立 古墳の築造	泉 谷	尾松、桜田(栗駒)	
		中期	須恵器の伝来	上荒町	長者原(栗駒)	
		後期	横穴、群集墳の盛行	菜沢西	鏡音沢(高清水)	
700	奈 良 時 代		平城京に都を遷す 大宝律令発布 (陸奥国新田権に判官を派遣) 多羅城に国府を移す 東大寺大仏開眼 (新田郡人に上毛野中村公の屬姓)			
				神田	城生野(篠館、伊治城跡) 糠塚(志波姫)	
				四ツ塙 清水沢 がんげつ		
800	平 安 時 代		平安京に都を遷す (新田郡等に復年を延ばす) (新田郡の百姓 日向国に流罪) (新田郡に讃岐郡を併合する) 坂上田村麻呂 銀夷を平定 前九年、後一年の役 中尊寺	がんげつ 菜沢東 中三代	折木山(高清水、極楽寺出土) 手取(高清水)	
			源賴朝、鎌倉幕府を開く			
1100						



図版 I がんげつ遺跡付近空中写真

ワクヤ山-467 (ハザマ) C 12-12 1967.5.13

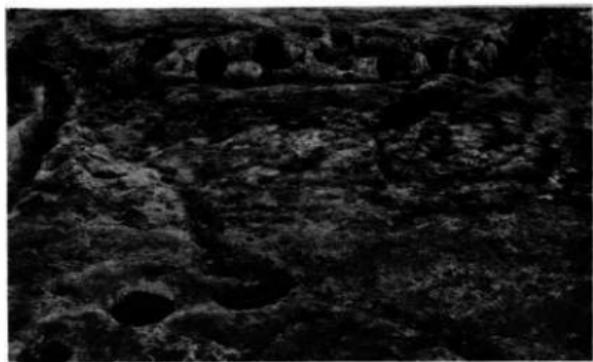


遺跡の遠景



遺構全景

図版2 遺跡の遠景と遺構全景



1 遺構の北東隅



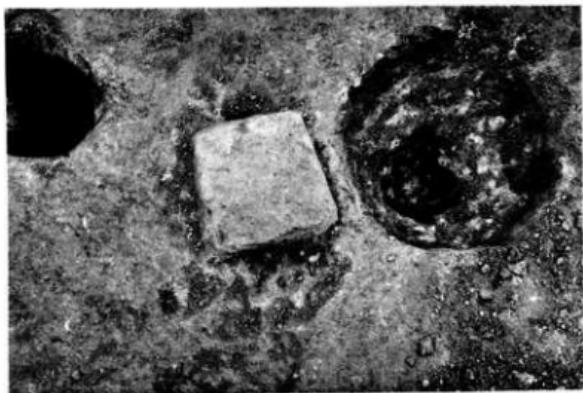
2 遺構の東南隅



3 層位と土器出土状況

図版3 遺構部分(1)

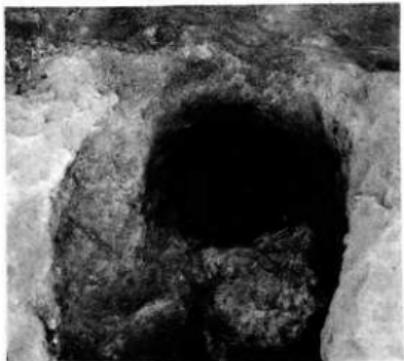
南側の特殊遺構(1)



南側の特殊遺構(2)



ピット1と耳皿の出土状況



図版4 遺構部分(2)



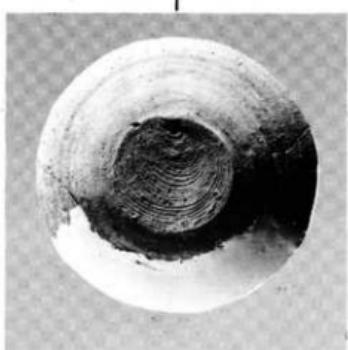
1-a



1-b



2-a



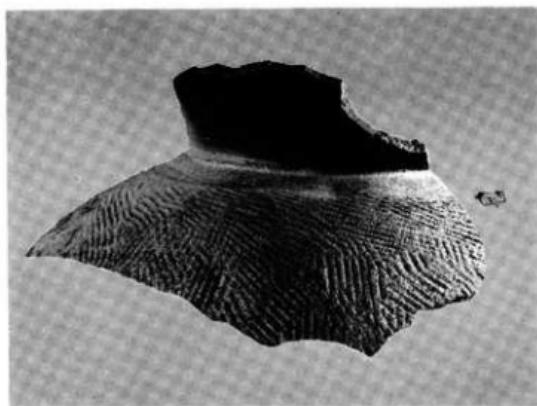
2-b



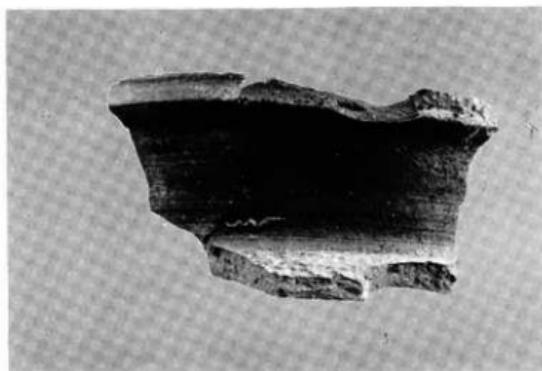
3

1 环1
2 环2
3 瓶

图版 5 須恵器(1)



1 艋

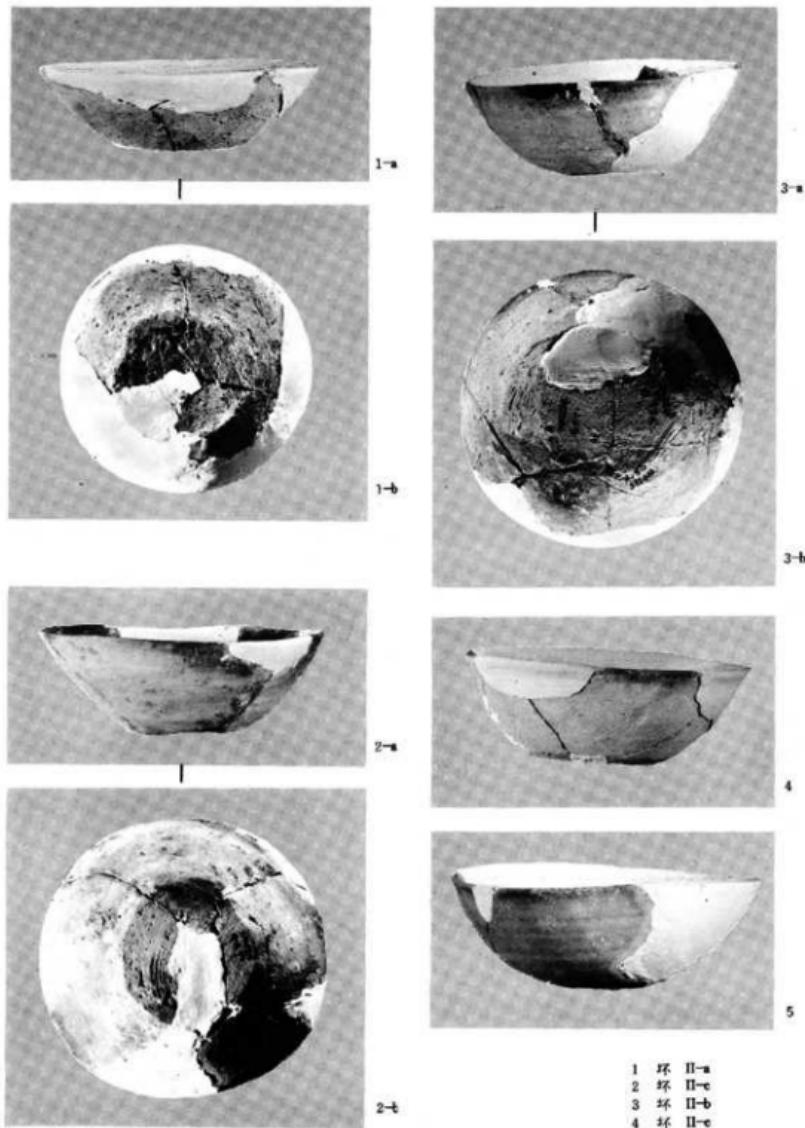


2 艋



3 長頸壺

圖版 6 須惠器 (2)

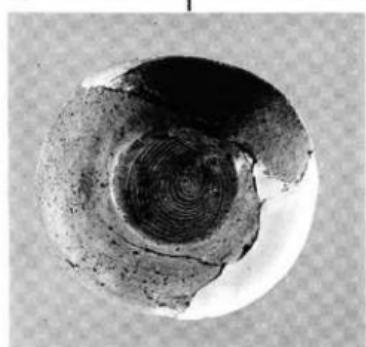


図版7 土師器・壺

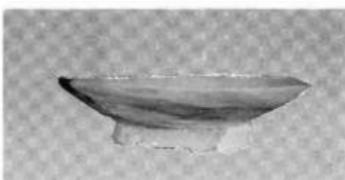
1 壺 II-a
 2 壺 II-c
 3 壺 II-b
 4 壺 II-e
 5 壺 II-d



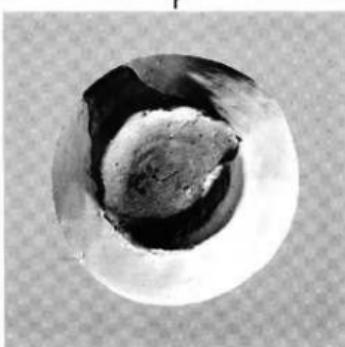
1-a



1-b



2-a



2-b



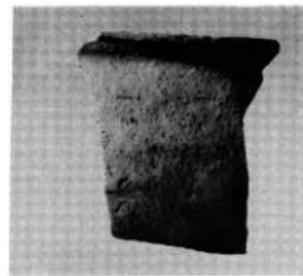
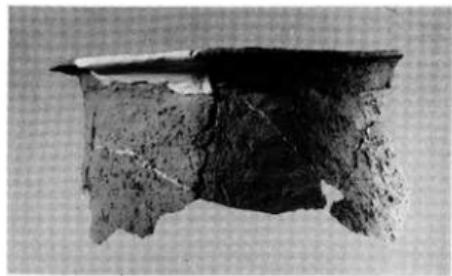
3



4

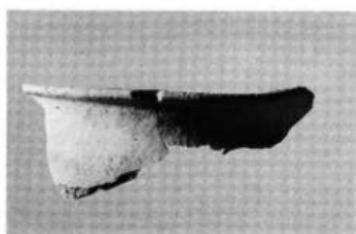
- 1 环II-e
- 2 高台付环
- 3 体部の「中」の縞割
- 4 底部の「X」のカマ印

図版8 土師器・环 高台付环



1

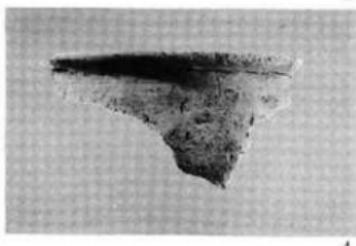
2



3



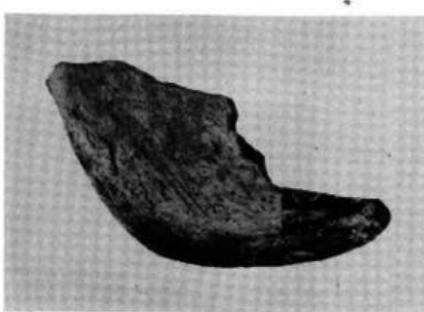
5



4



7



6

図版 9 土師器・壺ほか

- 1
2
3
4
5
6
7 九底壺



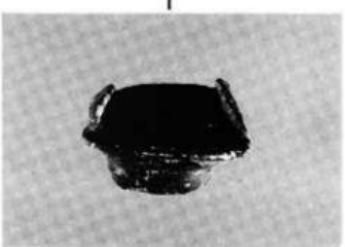
1a



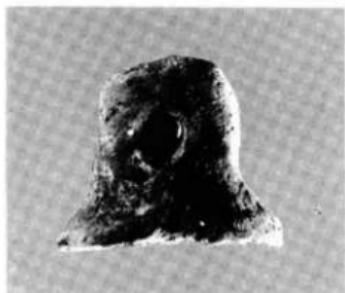
2a



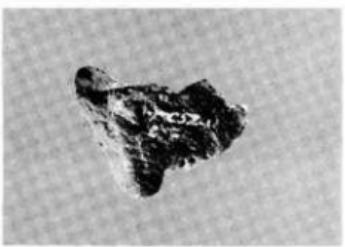
1b



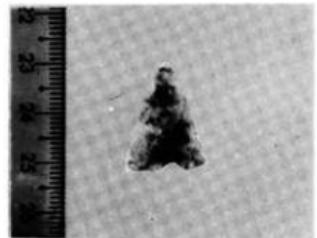
2b



3



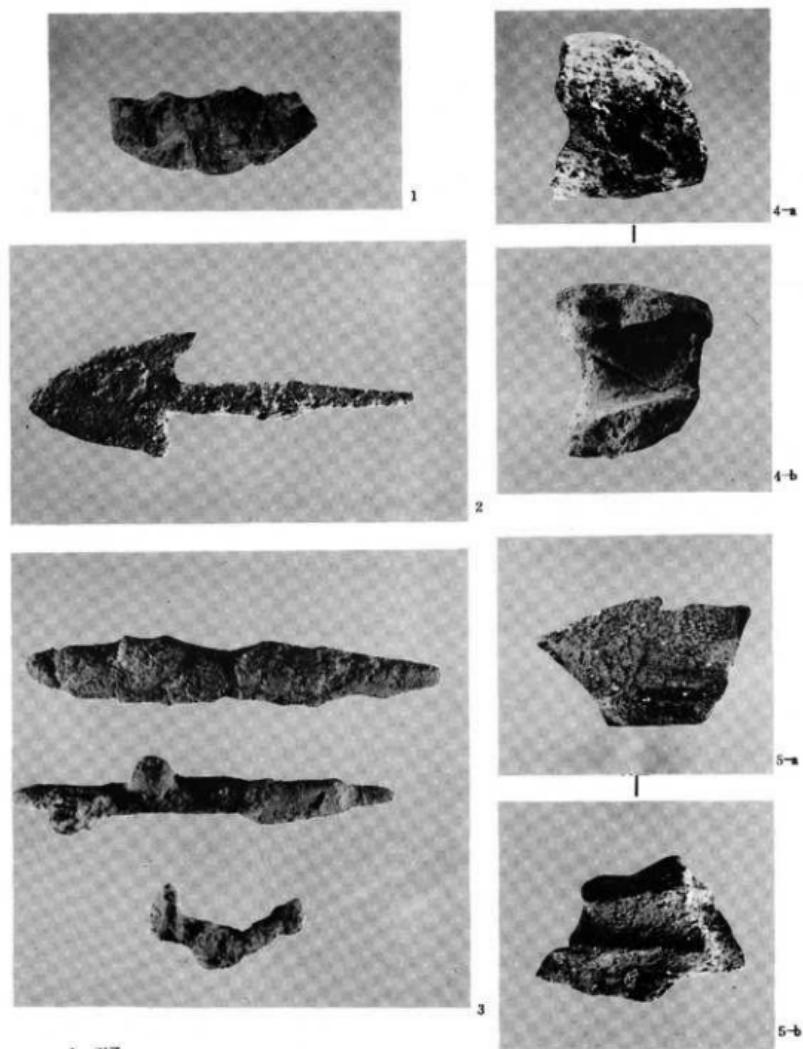
4



5

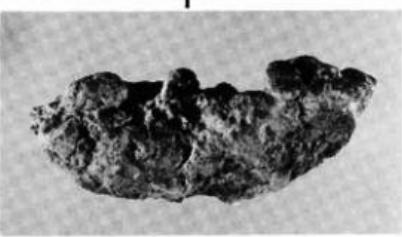
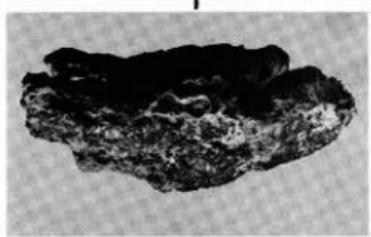
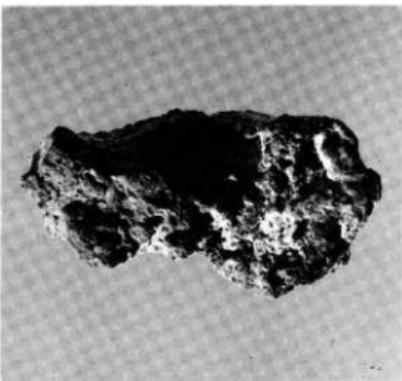
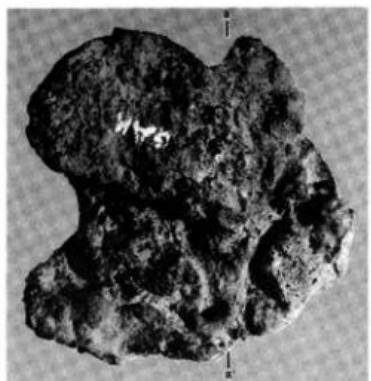
- 1 耳皿
2 耳皿
3 土鉢
4 小形手捏ね土製品
5 石鏡

図版10 耳皿ほか



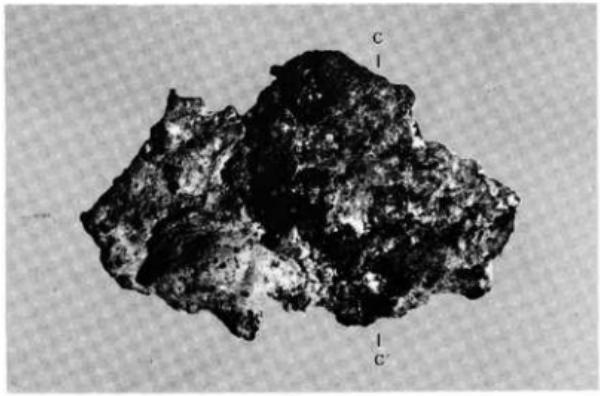
1 刀子
 2 鉄器
 3 鉄器1.2.3.4
 4 羽口
 5 羽口

図版II 鉄器 羽口

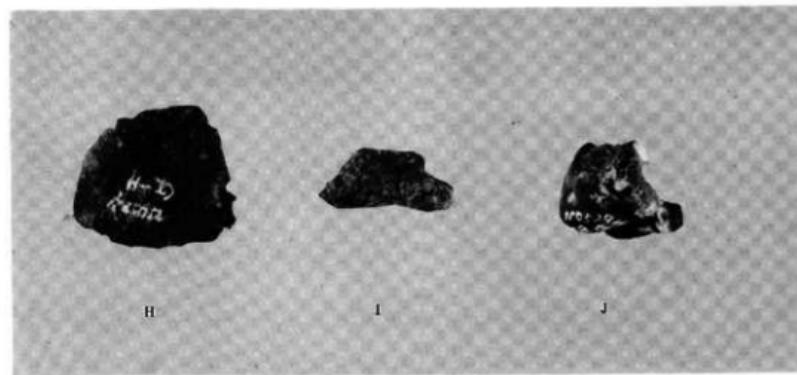
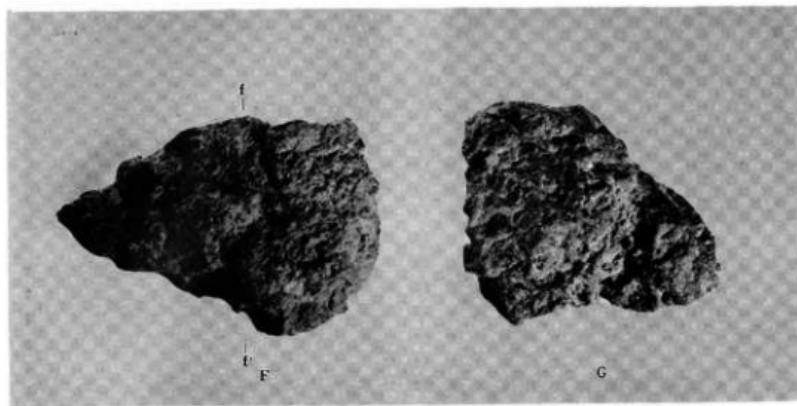
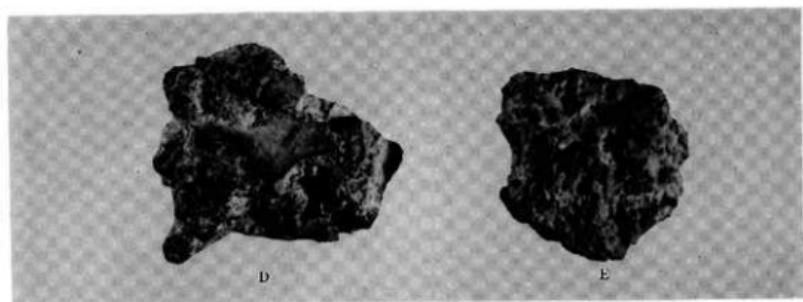


A

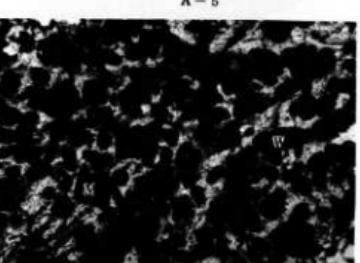
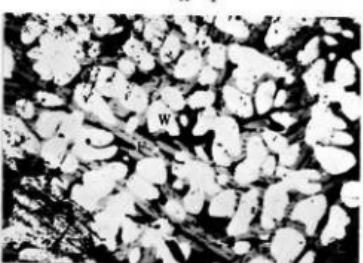
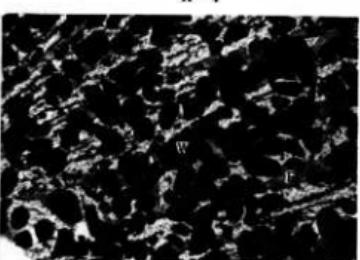
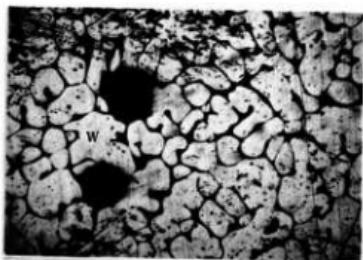
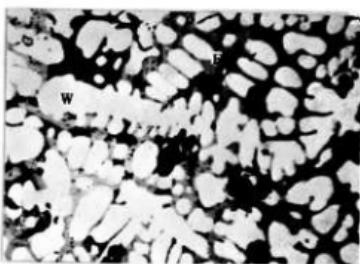
B



図版12 鉄津(1)

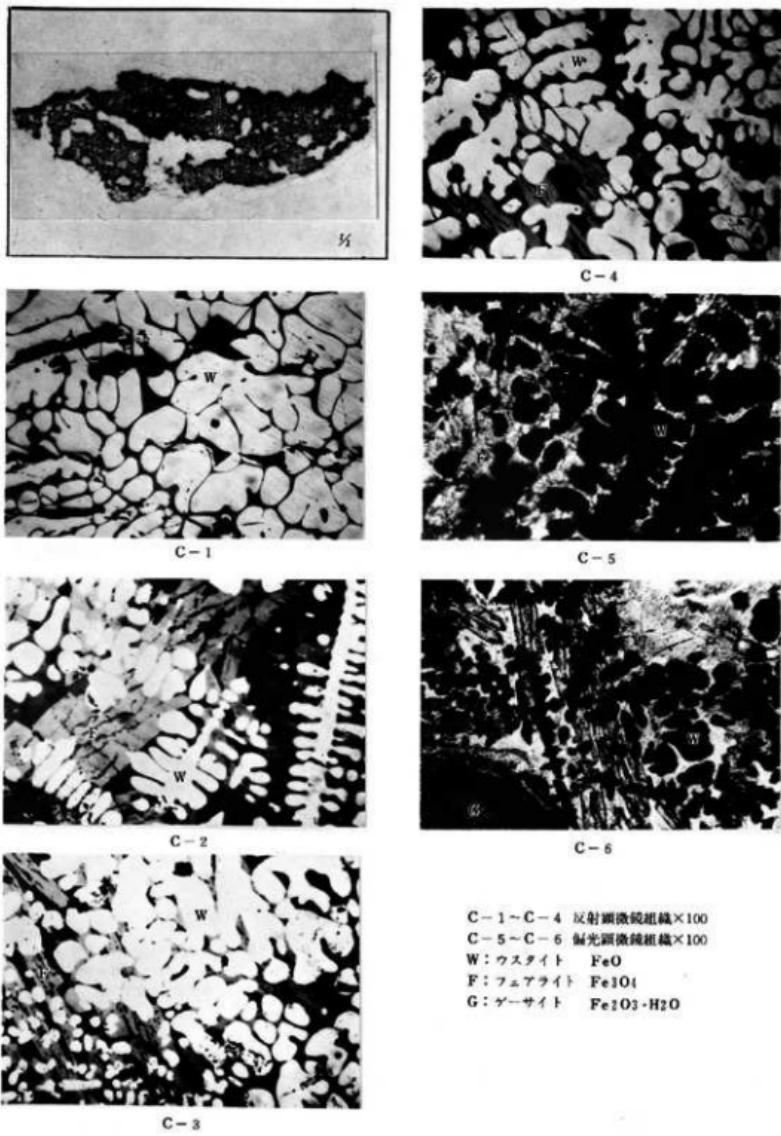


図版I3 鉄滓(2)



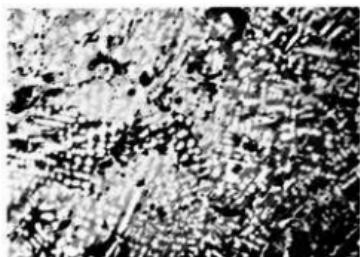
A-1～A-4 反射顕微鏡組織×100
A-5～A-6 偏光顕微鏡組織×100
W : ウスタイト FeO
F : フェアライト 2FeO·SiO₂
M : マグнетাই特 Fe₃O₄

図版14 鉄滓Aの鉱物組織



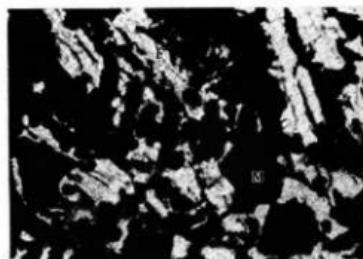
C-1～C-4 反射顕微鏡組織×100
 C-5～C-6 偏光顕微鏡組織×100
 W: ウスタイト FeO
 F: フェアライト FeO₄
 G: ゲーサイト Fe₂O₃·H₂O

図版15 鉄津Cの鉱物組織



F-1

F-5



F-2

F-6



F-3

F-1～F-5 反射顕微鏡組織×100
F-6 偏光顕微鏡組織×100
M: マグネサイト Fe₃O₄
W: ウスターイト 2FeO·SiO₂
F: フェアライト 2FeO·SiO₂

図版16 鉄津Fの鉱物組織



図版17

宮城県瀬峰町文化財調査報告書第1集

がんげつ遺跡 -平安時代の竪穴造構-

昭和52年3月20日 印刷

昭和52年3月25日 発行 ©

編集 瀬峰町文化財保護委員会

代表 高橋 亀寿吉

発行 瀬峰町 瀬峰町教育委員会

宮城県栗原郡瀬峰町藤沢字下田32の1

印刷 南部屋印刷株式会社

宮城県栗原郡築館町字小山68 TEL (02282) 42-2131

